岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 57

大旦遺跡
西谷遺跡
加部遺跡ほか

昭和58年度圃場整備に
伴う確認調査

1984年3月

岡山県教育委員会

序

本報告書には、圃場整備事業実施計画に伴う３遺跡の確認調査結果を収めました。

ここに収めました３遺跡の確認調査は、いずれも圃場整備事業の実施に先だって埋蔵文化財の保護、保存の資料を得て、圃場整備事業と調整を図ることを目的として、昭和58年度国庫補助事業として行われたものであります。

調査の結果、大旦遺跡（久世町）では縄文時代早期から奈良時代までの集落址約30,000㎡を、西谷遺跡（長船町）では奈良時代から中世までの集落址約3,000㎡を、加部遺跡ほか（佐伯町）では縄文時代晩期から鎌倉時代までの集落址約40,000㎡を確認することができました。

これらの成果を収めた本報告書が、文化財の保護、保存のため活用され、また、地域の歴史を研究する資料として役立てば幸いと存じます。

最後に、発掘調査ならびに報告書の作成にあたって、岡山県文化財保護審議会委員をはじめ、関係町の教育委員会および同文化財保護審議委員ならびに土地所有者等関係各位から賜りました多大な御指導と御協力に対し、厚く御礼申しあげます。

昭和59年３月

岡山県教育委員会

教育長　宮　地　暢　夫

大旦遺跡

例　　言

1．本書は岡山県教育委員会が昭和58年度国庫補助を受けて実施した「大旦(おおだん)遺跡」の発掘調査概要報告書である。

2．遺跡は真庭郡久世町大字台金屋に所在する。

3．発掘調査は文化課職員松本和男が担当し、専門委員の指導、助言を得て昭和58年11月５日から昭和59年２月29日まで実施した。

4．発掘調査は久世町役場、久世町教育委員会、久世町文化財保護審議委員、地権者等関係各位より絶大なる援助を受けた。特に発掘作業に従事していただいた台金屋地区有志の方々には大変お世話になりました。記して謝意を表わします。

5．遺物の整理は文化課分室で松本が行った。なお、遺物、実測図、写真等は文化課分室（岡山市西古松）において保管している。

6．本報告書の執筆、編集は松本が行った。調査にあたっては鵜沢弘美、報告書作成にあたっては文化課職員・平井勝、岡山大学学生・山田雅子の協力を得た。

7．本書に使用したレベル高は海抜高である。方位は第１、２図が真北、他は磁北である。

8．本書第２図に使用した地形図は建設省国土地理院発行の50,000分の１地形図（津山西部）を縮尺複製したものである。

目　　次

例　言

目　次

第１章　地理的・歴史的環境 …… 7

第２章　調査の経緯 …… 9

第３章　発掘調査の概要 …… 12

　　トレンチ調査の概要 …… 12

　　遺物 …… 18

第４章　まとめ …… 19

図　目　次

第１図　遺跡位置図 …… 7

第２図　大旦遺跡周辺分布図（Ｓ＝$\frac{1}{50000}$） …… 8

第３図　久世町文化財保護審議委員一行の現地見学風景 …… 11

第４図　大旦遺跡トレンチ設定図（Ｓ＝$\frac{1}{3000}$） …… 13

第５図　ＡＴ－１平・断面図（Ｓ＝$\frac{1}{60}$） …… 14

第６図　ＡＴ－１住居址内出土遺物（Ｓ＝$\frac{1}{4}$） …… 14

第７図　ＢＴ－７平・断面図（Ｓ＝$\frac{1}{60}$） …… 15

第８図　１号住居址断面図（Ｓ＝$\frac{1}{60}$） …… 16

第９図　ＢＴ－７内出土遺物（Ｓ＝$\frac{1}{4}$） …… 16

第10図　ＣＴ－17平・断面図（Ｓ＝$\frac{1}{80}$） …… 17

第11図　ＣＴ－17凹状遺構内出土土器（Ｓ＝$\frac{1}{4}$） …… 17

第12図　圃場整備地区内における遺跡範囲（縮尺不同） …… 20

第13図　ＡＴ－２～７平・断面図（Ｓ＝$\frac{1}{100}$） …… 21

第14図　ＡＴ－８、ＢＴ－４、５、13、14、ＣＴ－16、18平・断面図（Ｓ＝$\frac{1}{100}$） …… 22

第15図　ＣＴ－19～22平・断面図（Ｓ＝$\frac{1}{100}$） …… 23

第16図　包含層出土石器（Ｓ＝$\frac{1}{2}$、$\frac{1}{3}$） …… 23

第17図　Ｂ地点出土縄文土器（Ｓ＝$\frac{1}{3}$） …… 24

第18図　Ｂ・Ｃ地点出土縄文土器（Ｓ＝$\frac{1}{3}$） …… 25

第19図　ＢＴ－３黒色土層内出土土器（Ｓ＝$\frac{1}{4}$）……25
第20図　表採、包含層出土遺物（１～12…Ｓ＝$\frac{1}{4}$、13、14…縮尺不同）……26

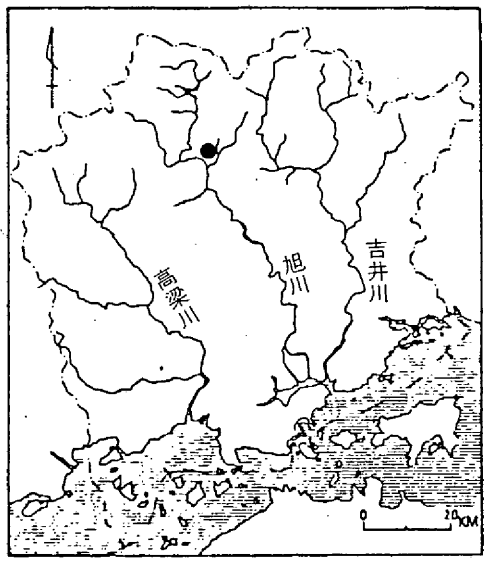
図　版　目　次

図版１　(1)　大旦遺跡Ａ・Ｂ地点全景（南から）……27
(2)　町指定「大旦遺跡」近景（南から）……27
図版２　(1)　大旦遺跡Ｃ地点遠景（北から）……28
(2)　ＡＴ－１遺構全景（南東から）……28
図版３　(1)　ＡＴ－１住居址の断面写真（西から）……29
(2)　ＡＴ－３全景（南西から）……29
図版４　(1)　ＢＴ－７の全景（南西から）……30
(2)　ＢＴ－７の土坑No.２、３、４全景（東から）……30
図版５　(1)　ＢＴ－３断面（北西から）……31
(2)　ＢＴ－４全景（南東から）……31
(3)　ＣＴ－17全景（南西から）……31
図版６　(1)　ＣＴ－16全景（西から）……32
(2)　ＣＴ－18全景（北西から）……32
(3)　ＣＴ－21全景（西から）……32
図版７　(1)　ＢＴ－７の１号住居址発掘風景（北から）……33
(2)　ＡＴ－８の埋めもどし作業風景（北から）……33
図版８　(1)　縄文時代早期（押型文土器）……34
(2)　ＢＴ－７出土弥生式土器……34
(3)　ＡＴ－１の住居址内出土土器……34
(4)　ＣＴ－17凹状遺構内出土土器……34
(5)　ＣＴ－17凹状遺構内出土土器……34
(6)　Ｃ地点出土平瓦……34
(7)　ＣＴ－17凹状遺構内出土土器……34

第１章　地理的・歴史的環境

大旦遺跡の所在する真庭郡久世町は岡山県の中央部を南流する旭川の上流域に位置し、東は久米町、南は落合町、西は勝山町、北は富村に接し、約75㎢の面積を有する。

久世町を通過する旭川は市街地で流路を東から南に大きく蛇行するが、これは北から南に延びる河岸段丘が突きだしているためである。この段丘の東には支流である目木川が市街地の東端で本流の旭川と合流している。この旭川と目木川の合流によって形成された沖積平野は久世町における最も大きな平担地形であり、主要な集落はこの平野に立地している。



第１図　遺跡位置図

大旦遺跡はこの旭川と目木川によって形成された沖積平野を南に望む標高約180m（沖積平野との比高差約40m）の低丘陵に立地し、町内では最も大規模な集落址と考えられている。

久世町内において現在知られている最も古い遺物は薬王寺西山遺跡、長光寺山遺跡、長光寺山古墳群など台金屋地区の丘陵で発見された縄文時代早期の押型文土器である。中期では余野上遺跡、後期では宮芝遺跡、三栄神社裏山遺跡、晩期では五反遺跡があるが、いづれも河川を見下す丘陵に複合して認められる遺跡が多い。弥生時代になると、前期の遺物が五反遺跡で発見されているのみで他の地域ではまだ認められない。中期後葉以降になると大旦地区、富尾地区、江森地区、樫東など旭川や目木川を見下すことのできる段丘上に形成され、後期になると中期から継続する遺跡以外に西口、余野、三坂、小谷、久世、草加部、中原、三崎地区など河川を見下す丘陵、山裾に大規模ではないが全町的に認められている。

古墳時代に入ると数多くの古墳が各水系を見下す丘陵に認められる。分布は数基を単位とする古墳群（余野下、樫東地区）と10基以上の古墳を単位とする古墳群（多田地区、惣、富尾地区）に分けられるが、中でも旭川右岸に立地し、前方後円墳２基を含めて約20基が確認されている惣、富尾地区は現在のところ他の地区と比較して卓越している。

歴史時代に入ると奈良～平安時代の遺跡が現在の集落と重複して存在するが、とりわけ注目

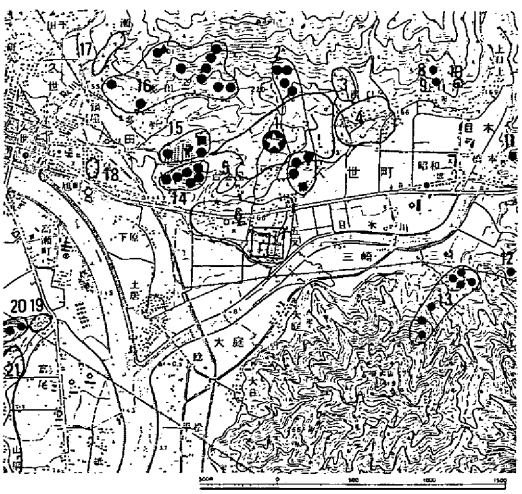
される遺跡が五反廃寺と白猪屯倉の設置についてであろう。五反廃寺は美作国最西端に所在する白鳳時代創建の寺院址である。周囲からは軒丸瓦、軒平瓦、鴟尾が出土しており、軒丸瓦は現在のところ7種類、転平瓦は6種類が確認されている。なかでも、内区に木の実状の文様、菊花状の文様を配置した瓦当文様は県内では類例を見ないものである。寺域は1町四方の説が今日では有力である。一方、吉備五郡に白猪屯倉を置いたと記している『日本書紀』や『続日本紀』などから旧大庭郡内に白猪屯倉が設置されていたという説もあるが、まだ定説とはなっていない。また、古代の耕地割制度と云われる条里が久世町でも4ヶ所確認されているが、目木条里は中世に区画された耕地割の可能性が指摘されている。

このように、久世町一帯には縄文時代～平安に至る遺跡が間断なく認められるが、とりわけ、弥生時代及び奈良時代の遺跡が注目されてきた地域であった。

参考文献

(1)　久世町史編集委員会編『久世町史』　久世町教育委員会　昭和53年刊

(2)　松本和男『目木条里発掘調査報告書』　久世町教育委員会　昭和57年刊



1. 大旦遺跡
2. 金屋古墳群
3. 散布地
4. 散布地
5. 薬王寺西山遺跡
6. 五反遺跡
7. 五反廃寺
8. 古墳
9. 古墳
10. 経塚
11. 宮ノ叱2号墳
12. 古墳
13. 三崎古墳群
14. 長光寺山古墳群
15. 蛇ノ尾古墳群
16. 多田古墳群
17. 散布地
18. 鍋屋遺跡
19. 散布地
20. 富尾古墳群
21. 散布地

第2図　大旦遺跡周辺分布図（S＝$\frac{1}{50000}$）

第2章　調査の経緯

大旦遺跡は弥生時代から古墳時代の複合遺跡であるが、昭和29年に耕地整理を兼ねて瓦粘土を採土中に弥生時代の貯蔵穴が多数発見され、一部が緊急調査され、現在では町指定史跡として保存されている重要な遺跡である。（註１）

この台金屋地区一帯に「農村総合整備モデル圃場事業」の計画があることを、昭和56年に久世町教育委員会から連絡を受けたため、県文化課、町役場、町教育委員会の三者で現地踏査を行った。その結果、当地区は町指定史跡が存在する重要な遺跡であるため、もし計画通りの工事着工を考えているならば、町当局においても文化財専門職員を確保して、早急に体制作りを行わなければ困難である旨を指導してきた。

その後、昭和56年６月８日付け、久建第732号で久世町長から発掘通知が提出され、同年７月17日付け久教第1101号で町教育委員会から文化庁長官宛に進達がなされた。県文化課と町当局との発掘通知にもとづく協議結果は(1)工事施行前に確認調査を実施すること、(2)調査の結果、重要な遺構が発見された場合は別途協議するの２点であった。

遺跡の重要性及び工事計画からみて、早急に圃場整備地区内の遺跡全体の規模、時期等を明らかにして、遺跡の保護、保存対策を講ずる基礎資料を得る必要があるため、とりあえず、確認調査については岡山県教育委員会が昭和58年度国庫補助を受けて発掘調査を実施することとなった。

発掘調査は岡山県文化財保護審議会専門委員の指導、助言を得て、昭和58年11月５日から昭和59年２月29日まで実施した。調査にあたっては久世町役場、同町教育委員会、同町文化財保護審議委員をはじめ地権者等関係各位には多大の御協力を得た。また、発掘作業に従事していただいた地元有志の方々にも協力を得た。記して厚く御礼申し上げます。

調査体制

専門委員

鎌木義昌　岡山理科大学教授

近藤義郎　岡山大学教授

水内昌康　岡山女子看護専門学校教頭

岡山県教育庁文化課

課長　早田憲治　　課長代理　橋本泰夫　　課長代理　吉本唯弘　　課長補佐　河本　清

主任　遠藤勇次　　文化財保護主査　松本和男（調査担当）

日誌抄

昭和58年

11月5日(土)　発掘器材の搬入。

11日(金)～17日(木)　C地点T－1～17の発掘。CT－12～16の清掃作業。

18日(金)～21日(月)　AT－1、2、CT－4、11の発掘。AT－2、CT－5～8の全景、断面写真撮影。

22日(火)～25日(金)　AT－1、3、4、BT－3～5、CT－18、19の発掘。CT－11の全景、断面写真撮影。

26日(土)～30日(水)　AT－3、4、BT－18～20の発掘。CT－18、19の全景、断面写真撮影。CT－1～3、5、8～10、15、18、20の断面実測。

12月1日(木)～6日(火)　AT－3～9、BT－6～9の発掘。CT－12、14の断面実測。AT－3～6の遺構発掘。AT－3～6、BT－3の断面写真撮影。

7日(水)～9日(金)　BT－7、10～14の発掘。AT－9、BT－4～6、8～11、CT－19断面撮影。BT－3、4、13の遺構発掘。AT－4～9、CT－19の断面実測。

10日(土)～13日(火)　BT－7、CT－21、22の発掘。CT－4、21の遺構発掘。CT－22の断面写真撮影及び実測。

14日(水)　AT－1の住居址、BT－7、CT－20の発掘。AT－3、CT－21の断面実測。CT－4、13、16、21の全景、断面写真撮影。CT－16の断面、平面プラン実測。

15日(木)　AT－1の全景、断面写真撮影。BT－3～6、CT－13の断面実測。BT－7、CT－17の遺構発掘。CT－1～13の位置図作成。

16日(金)～23日(金)　AT－8、CT－17の発掘。BT－1、2、7～12、14、CT－4の断面実測。BT－7の断面写真撮影及びベルトの除去。CT－1～7の埋めもどし。遺物、図面整理。

24日(土)～27日(火)　CT－17の発掘。CT－15、19の埋めもどし。久世町文化財保護審議委員一行の現地見学。岡山県文化財審議委員の来跡。

26日(月)～27日(火)　CT－20の埋めもどし。CT－17の写真撮影及び平面プランの実測、遺物のとり上げ。

昭和59年

1月6日(金)～11日(水)　AT－2、3、BT－4、5、13、14、CT－21、22の平面プラン、CT－17の断面実測及び写真撮影。CT－16～19、21、22の埋めもどし。

12日(木)　AT－1、4の平・断面実測。AT－7の全景写真撮影。AT－8の断面写真撮影及び実測。

13日(金)～19日(木)　AT－5～7の平面プラン実測。BT－7の住居址発掘。AT－2、5～9、BT－6、CT－8～14の埋めもどし。遺物整理。

20日(金)　ＢＴ－７の住居址、貯蔵穴の発掘。ＡＴ－１の埋めもどし。

21日(土)　ＢＴ－７の住居址、貯蔵穴の全景、近景写真撮影及び平面・断面の実測、遺物のとり上げ。ＡＴ－１、３の埋めもどし。

23日(月)　ＡＴ－４、ＢＴ－１～５、７～14の埋めもどし。

〃　30日(月)

２月１日(水)　ＢＴ－７の埋めもどし。発掘器材の運搬。調査概報の作成。

〃　29日(水)

註

(1)　調査報告書は未刊であるが、概要については「久世町史」に一部紹介されている。
久世町史編集委員会　『久世町史』　久世町教育委員会　昭和53年刊

第３図　久世町文化財保護審議委員一行の現地見学風景

第３章　発掘調査の概要

トレンチ調査の概要

発掘調査は圃場整備計画地内に45ヶ所のトレンチを設定して実施した。（第４図）トレンチは２×５ｍ、２×10ｍを基本として調査可能な地点に任意設定した。その結果、削平されて遺構及び包含層が検出されなかったトレンチはＡ地点ではＴ－９、Ｂ地点ではＴ－１、２、６、８～12、Ｃ地点ではＴ－１～３、５～15であった。ここでは、各地点における代表的なトレンチについて概要を記す。

Ａ地点

当調査区には９本のトレンチを設定して、遺構の確認調査を実施した。遺構はＡＴ－２（第14図）のように表土直下で検出されるものと、ＡＴ－3（第14図）のように包含層下で検出される２種類が認められた。

ＡＴ－１（第５、６図）

調査区の南端に位置し、谷部の急斜面に設定したトレンチである。旧地形は北西から南東に傾斜し、遺構は地山面で検出された。断面観察では８層に区分されるが、１～４層は水田造成土層である。遺物は４層で弥生時代後期、奈良時代の須恵器、炉壁片、近世遺物、５層で弥生時代中期、後期の土器が出土している。遺構としては住居址、柱穴、土坑がある。住居址の規模は不明であるが、方形プランを呈するものである。床面からの壁高は北側で56cmあり、周囲には幅約10cm、深さ約３～６cmの壁帯溝がめぐっている。調査範囲内には柱穴がない。遺物は床面で出土したが、図示できるものが少なかった。（第６図）、これらの遺物からみて、古墳時代前期の住居址と考えられる。

Ｂ地点

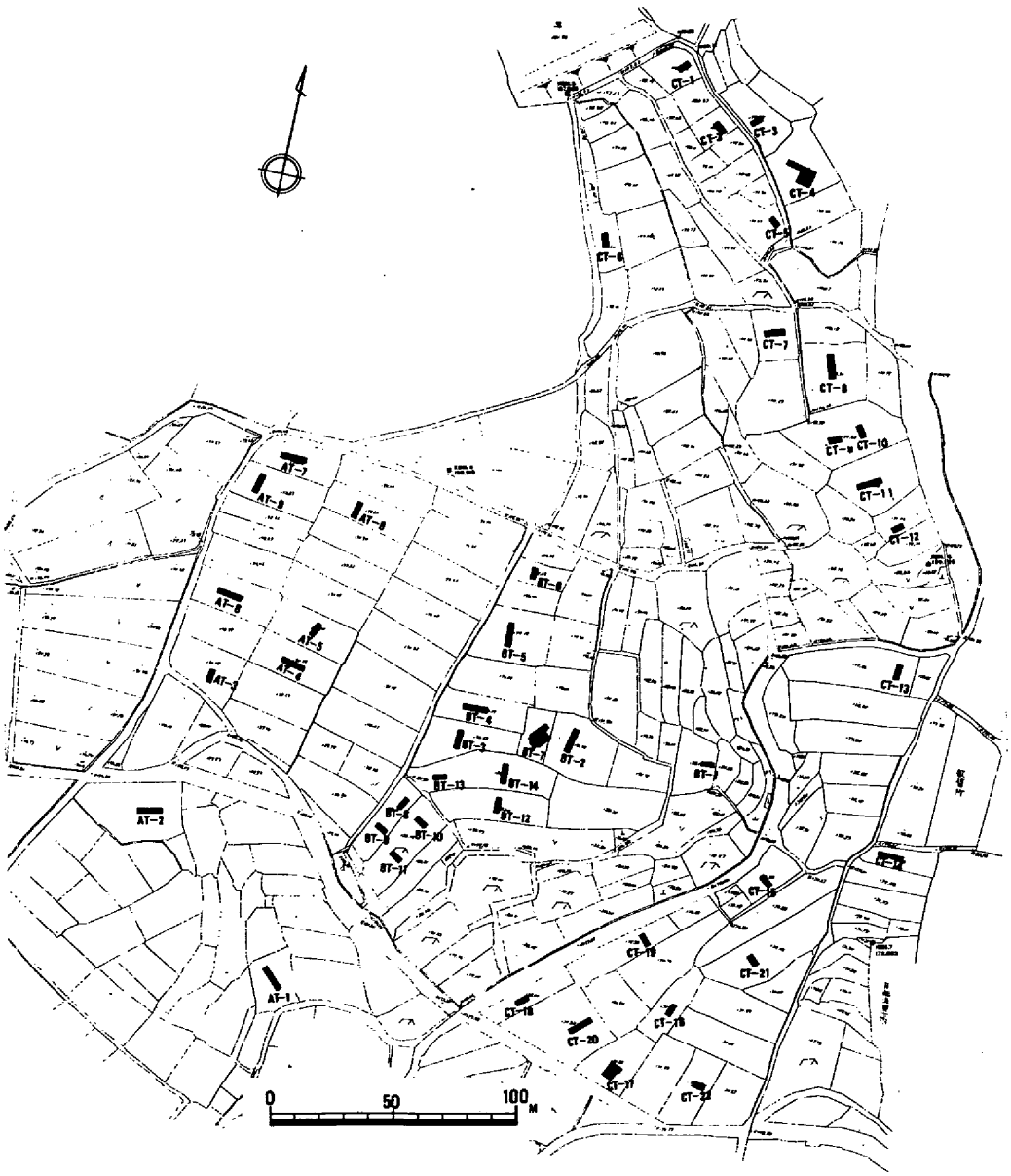
当調査区には14本のトレンチを設定して遺構の確認調査を実施した。その結果、削平を受けて遺構が全く存在しないトレンチ（ＢＴ－８～11）と遺構が多数確認されたトレンチ（ＢＴ－７）の２種類が認められた。さらに注目すべき点はこの地区で縄文時代早期の押型文土器が出土していることである。（第17、18図）

ＢＴ－７（第７～９図）

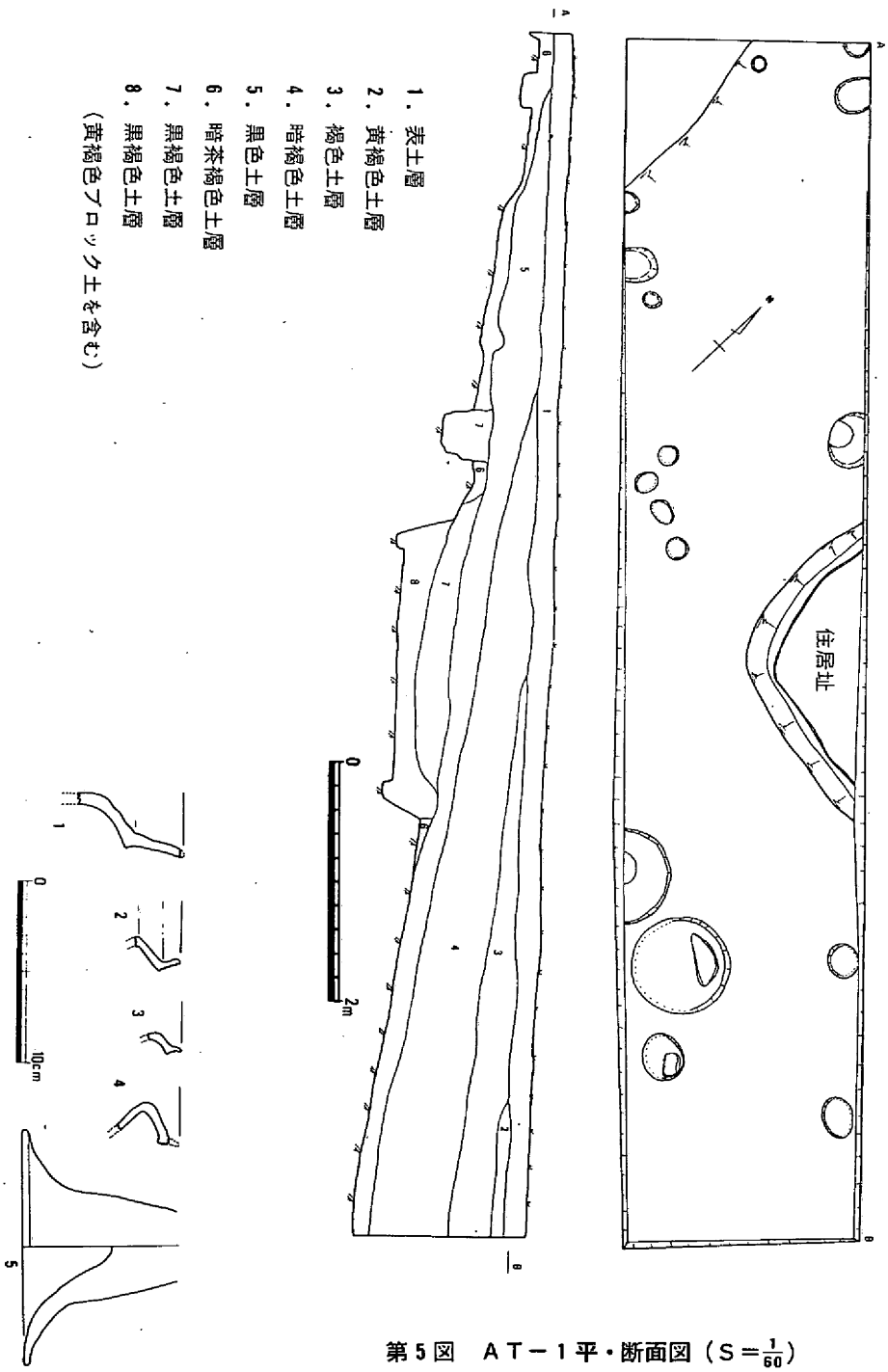
調査区のほぼ中央部に位置するトレンチである。遺構は第４層で検出され、住居址２軒、土坑４、柱穴多数が確認された。１号住居址は長軸が5.4ｍ、短軸が4.5ｍの楕円形プランを呈する。床面から壁高までは北側で30cm、平均して15cm程ある。壁帯溝は検出されなかった。ピットは住居址内に８個検出されたが、中央にピットをもつ４本柱の住居址である。遺物として

は土器、石器がある。住居址はこれらの遺物からみて弥生時代後期中葉のものと考えられる。

２号住居址の規模は不明であるが、壁帯溝からみてほぼ楕円形プランを呈すると思われる。壁帯溝は２本あり、いづれも幅が約15～25cm、深さ約５～９cmを測る。柱穴は２個あり、壁帯溝に対応する。壁帯溝の切り合い関係からみて、拡張した住居址である。弥生時代中期の遺物も出土しているが、後期中葉ないし後葉の住居址と考えられる。土坑は円形と長方形プランの２種類が確認されている。切り合い関係からみて、土坑２は３と４に切られており、１号住居

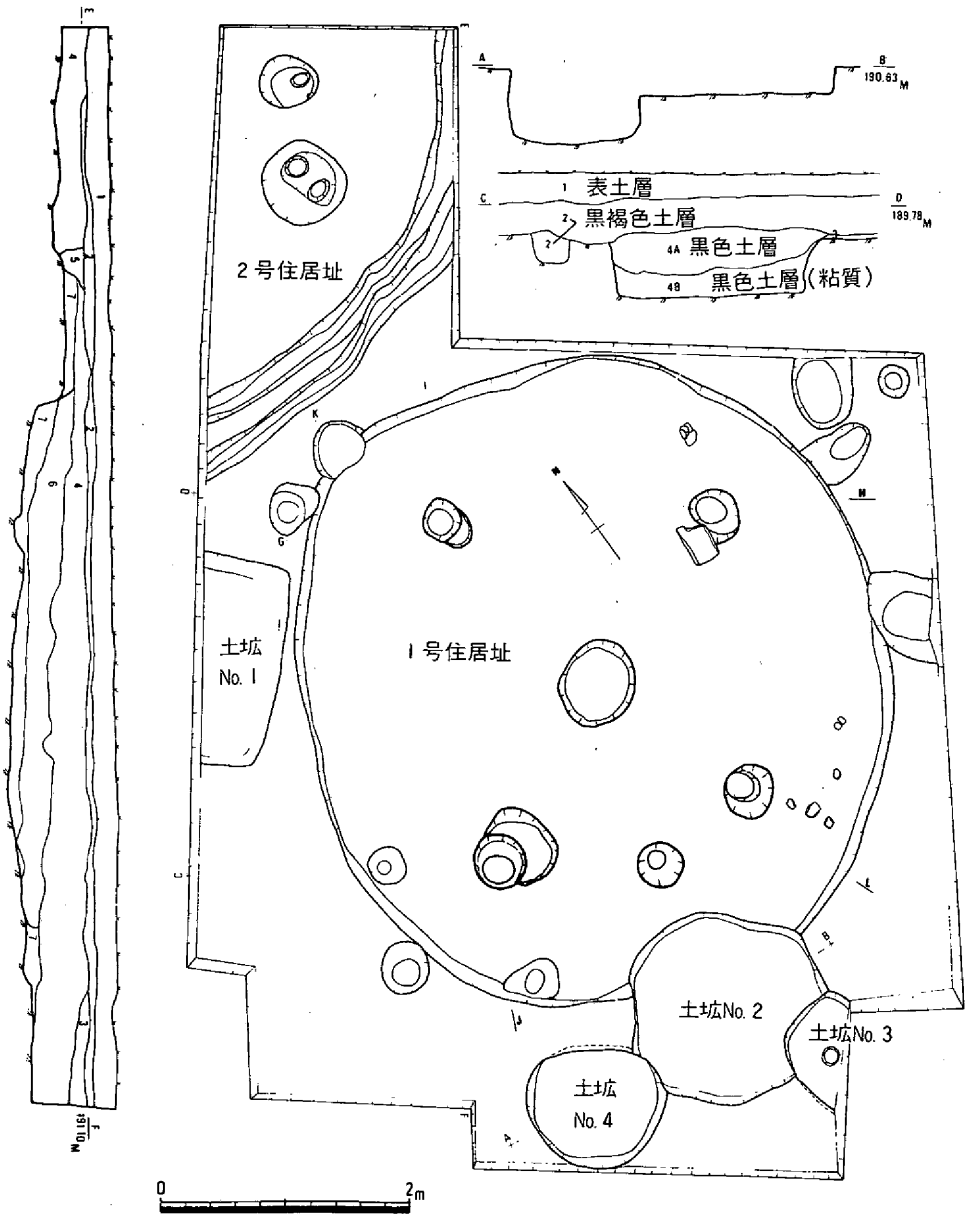


第４図　大旦遺跡トレンチ設定図（S＝$\frac{1}{3000}$）



第5図　ＡＴ－１平・断面図（Ｓ＝$\frac{1}{60}$）

第6図　ＡＴ－１住居址内出土遺物（Ｓ＝$\frac{1}{4}$）



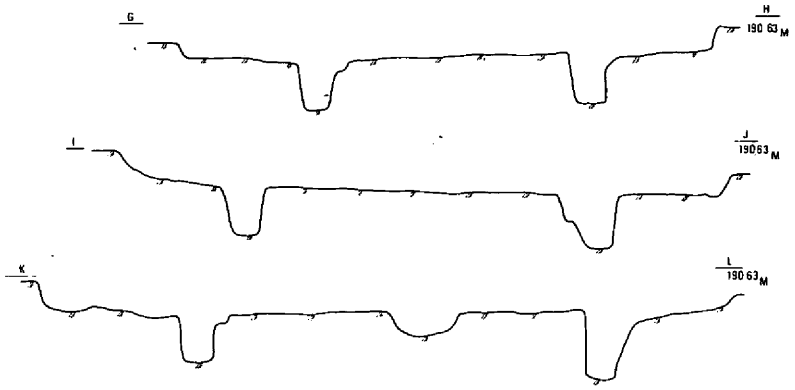
1．表土層
2．茶褐色土層
3．暗黄色土層
4．暗褐色土層
5．褐色土層
6．黒褐色土層
7．黒褐色土層
（黄色地山土を含む）

第7図　BT－7平・断面図（S＝$\frac{1}{60}$）

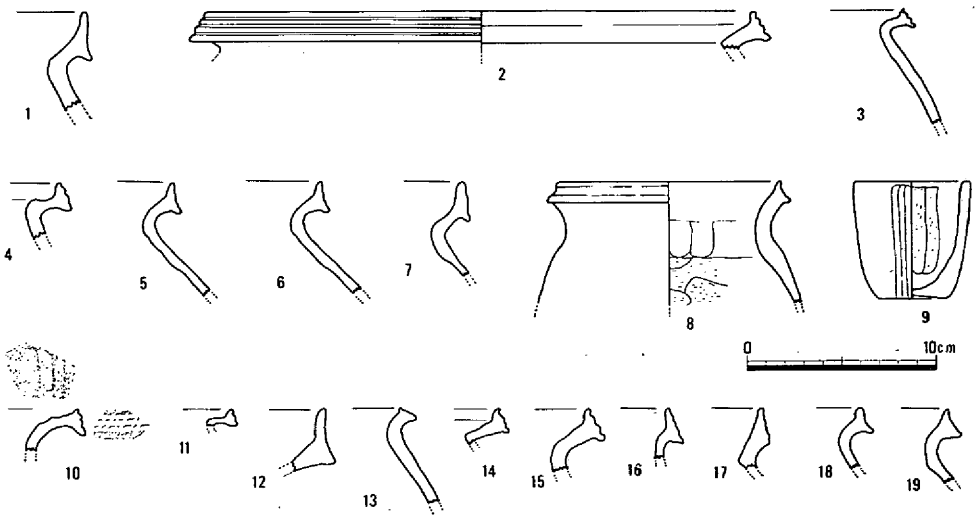
址は土坑２に切られていることから、１号住居址→土坑２→土坑３、４という順序が考えられる。この切り合い関係から土坑はいずれも弥生時代後期中葉～後葉のものと考えられる。土坑１には縄文時代早期、弥生時代後期前葉の遺物が出土しているが、完掘していないため不明である。弥生時代後期の範疇に入るものと思われる。

Ｃ地点

当調査区には22本のトレンチを設定して遺構の確認調査を実施した。その結果、削平を受けて遺構が全く存在しないＣＴ－１トレンチと包含層及び遺構が確認されたＣＴ－17の２種類が認められた。この調査区で注目すべき点は縄文時代早期の押型文土器、五反廃寺と同じ軒平瓦

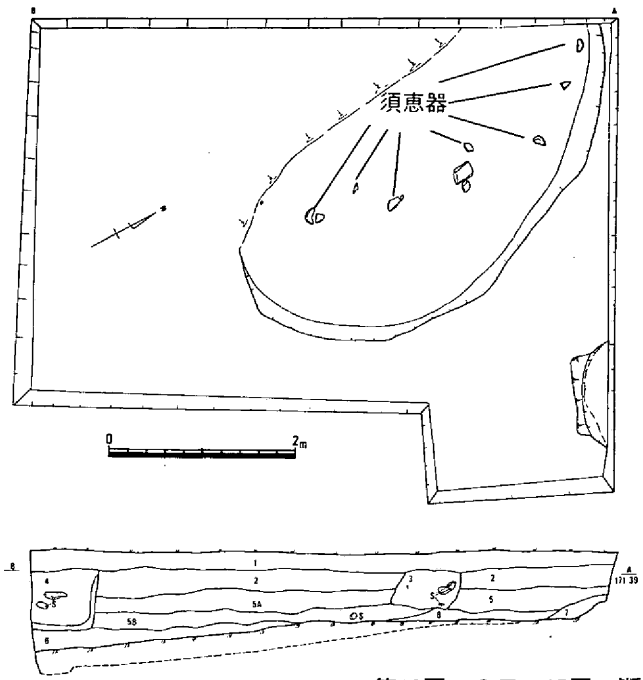


第８図　１号住居址断面図（Ｓ＝$\frac{1}{60}$）



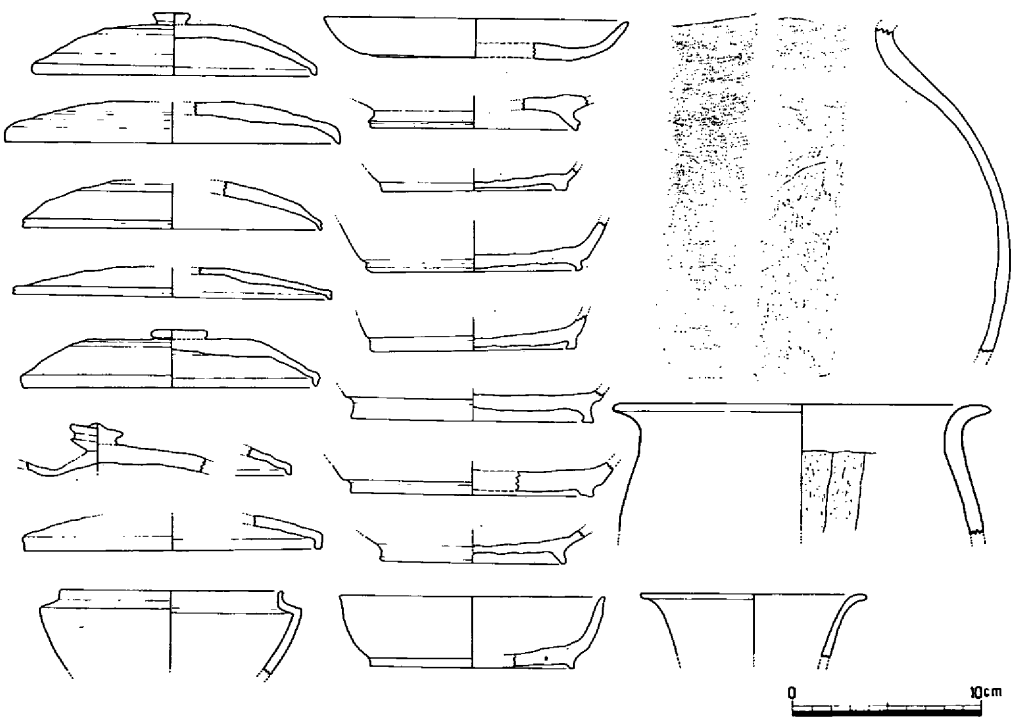
第９図　ＢＴ－７内出土遺物（Ｓ＝$\frac{1}{4}$）

1 ……１号住居址床面付着　　13……No.１土坑
2～9…１号住居址床面上層　　14～17…No.２土坑
10～12…２号住居址壁帯溝内　　18、19…No.４土坑



1．表土層
2．暗茶褐色土層
3．黒褐色土層
4．野ツボ
5 A．黒褐色土層
5 B．黒褐色土層
6．黒褐色粘質土層
7．暗黄褐色土層

第10図　ＣＴ－17平・断面図（Ｓ＝$\frac{1}{80}$）



第11図　ＣＴ－17凹状遺構内出土土器（Ｓ＝$\frac{1}{4}$）

や８世紀代の須恵器がかなり出土していることである。（第20図）

ＣＴ－17（第10、11図）

調査区のほぼ南端に位置するトレンチである。旧地形はほぼ東から西に傾斜し、丘陵端部近くの状況を呈している。遺構は野ツボ、土坑と凹状遺構のみであったが、奈良時代の須恵器がかなりまとまって出土したトレンチでもある。土坑内からは鉄滓、奈良時代の須恵器、近世陶磁器が出土した。凹状遺構と呼称しているこの遺構は長軸が約５ｍ、短軸が約３ｍの長楕円形プランを呈する。この遺構からは須恵器（甕、杯蓋、壺蓋、壺、皿、杯）、台石と思われる石器が出土している。これらの遺物から、８世紀前葉の遺構と思われる。なお、遺物は２層から６層まで包含するが、２～４層では弥生時代後期の土器、古墳時代、奈良時代の須恵器、鉄滓、近世陶磁器が、５、６層では土師器、古墳時代、奈良時代の須恵器が出土している。Ｃ地点では最も良好な状態で遺物が出土したトレンチである。

遺物（第15～20図）

遺物は耕作土、造成土、包含層、遺構内と各層から出土した。時期は縄文時代早期から近世に至る遺物がある。ここでは、本遺跡における代表的な遺物を一括して説明を加える。

第15図１、３～５は縄文時代早期の石器である。１はサヌカイト製のスクレーパー、３は乳棒状石斧、４は砂岩製の凹石、５は砂岩製のすり石である。２は緑色片岩の石庖丁で、弥生時代のものである。第17、18図は縄文時代早期の土器である。大部分は格子目と楕円の押型文であるが山形文と無文もわずかに認められる。第19図はＢＴ－３の黒色土層において出土した弥生時代の土器である。この土層内には弥生時代中期後葉～後期末の遺物が包含されているが、例えば、ＡＴ－８では古墳時代後期の須恵器、ＢＴ－４では縄文時代早期、８世紀前葉の須恵器、ＣＴ－16では弥生時代後期、古墳時代後期、奈良時代後期の須恵器が出土するなど、本遺跡での黒色土層（いわゆる黒ボク層）は縄文時代早期～奈良時代の遺物を包含する土層であるといえる。

第20図は表採と各地点から出土した代表的な遺物である。２はミニチュア土器、３はソロバン玉型土製品、４は土錘である。５は鼓形器台である。外面全体と受部内面には丹塗りが施されている。６～12は８世紀前葉の須恵器である。７～10は杯蓋、６、11、12は高台付の杯である。杯蓋のつまみは６と７では異なり、杯は高台の比較的に高い11と低くて細い６と低くて厚い12がある。13、14はＣ地点出土の軒平瓦である。13は格子叩き目、14は縄叩き目をもつ瓦である。瓦の出土は極めて少ないが、この地域では須恵器とともに注目しなければならない遺物である。なお、この概報には図示できなかったが、この地区一帯で炉壁片、鉄滓をかなり出土している。いづれも近世までの遺物を包含する土層から出土しているため年代決定が困難であるが、「台金屋」という地名から推察しても、製鉄関連遺構がこの地区に存在した可能性を示すものといえよう。

第4章　ま　と　め

今回の大旦遺跡の調査は圃場整備計画地内をA、B、Cの3地点に分けて合計45本のトレンチを入れることによって、遺跡の規模、性格を確認することを目的としたものである。その結果、計画予定地内にはA地点で約18,000㎡、B地点で約3,500㎡、C地点で、約8,500㎡の合計30,000㎡におよぶ遺跡の存在が明らかにされたが、(第12図）計画地外においても遺物散布がみられるため、大旦遺跡は広範囲に存在するものと思われる。ここでは確認調査結果をもとに判明した大旦遺跡の実体を記してまとめにかえたい。

当遺跡は旭川が市街地で流路を東から南に変える河岸段丘上に位置する遺跡である。この段丘をA～Cの3地点に分けて調査を実施したが、いづれの地区においても、粗密の差はあるものの遺構、遺物が確認された。

大旦遺構跡として町指定史跡範囲はA、B両地点の中間に位置するが、地形的にみても両地点は基本的には同一地区内の遺跡である。以下、時代別に説明を加える。

当遺跡で最も古い遺物は縄文時代早期の押型文土器、乳棒状石斧、すり石、凹石、スクレーパーである。出土地点はB地点ではT－3、4、7、13、C地点ではT－22と極めて限定された地点に認められたが、遺構は検出されなかった。今回出土した押型文土器の文様は7種類に分類されるが、この台金屋地区内の他地点においても同じ土器が出土しているが出土量はあまり多くない。（註1）このような遺跡の在り方は先学の研究によって指摘されているように、本遺跡においても決して長期間継続して生活が営まれたものではなく、単一の集団移動の結果と考えるのが妥当であろう。

弥生時代に入ると、3地点とも広範囲に遺物の散布、遺構が確認されたが、この地区は出土遺物からみて、中期中葉頃から開発が行われ、後期になって飛躍的に遺跡が拡大された地域であったと思われる。しかしながら、トレンチ調査であるため速断はできないが、本遺跡での遺構の在り方は県南の沖積平野に認められるような遺構密度ではなく（註2）、遺構は広範囲に認められるが、切り合い関係が比較的に少ない遺跡と推察される。

古墳時代も弥生時代と同様に3地点で遺物の出土がみられたが、遺構はA地点の住居址1軒だけである。しかし、確認された住居址が谷部の急斜面にもかかわらず存在するため、丘陵平坦部だけでなく、日照条件の良好な谷部についても、今後は注目しなければならない遺跡である。

歴史時代も弥生、古墳時代と全く同じ状態で遺物が出土するが、特にC地点において遺構、遺物が出土している。遺物は軒平瓦と須恵器がある。縄叩き目と格子叩き目をもつ軒平瓦は五

反廃寺と同時期と考えられる。須恵器の大半は８世紀前葉を中心とするものである。これらの遺物からみて、本遺跡は五反廃寺との関連や大庭郡衙の位置等を考えるうえで極めて重要な地区と推察される。

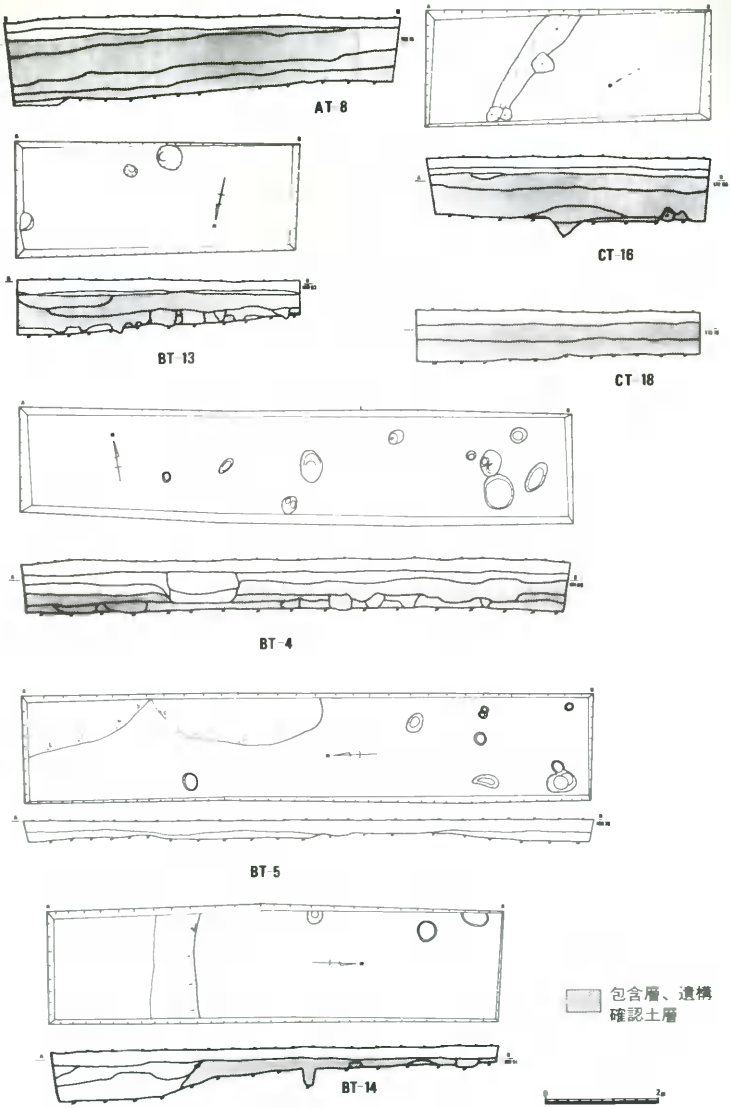
今回の調査で圃場整備計画地区内の遺跡をほぼ推定することができた。今後は、この調査結果にもとづいて圃場整備計画を再度協議しなければならないが、今後の協議結果と町当局の文化財への対応が注目される遺跡である。

註

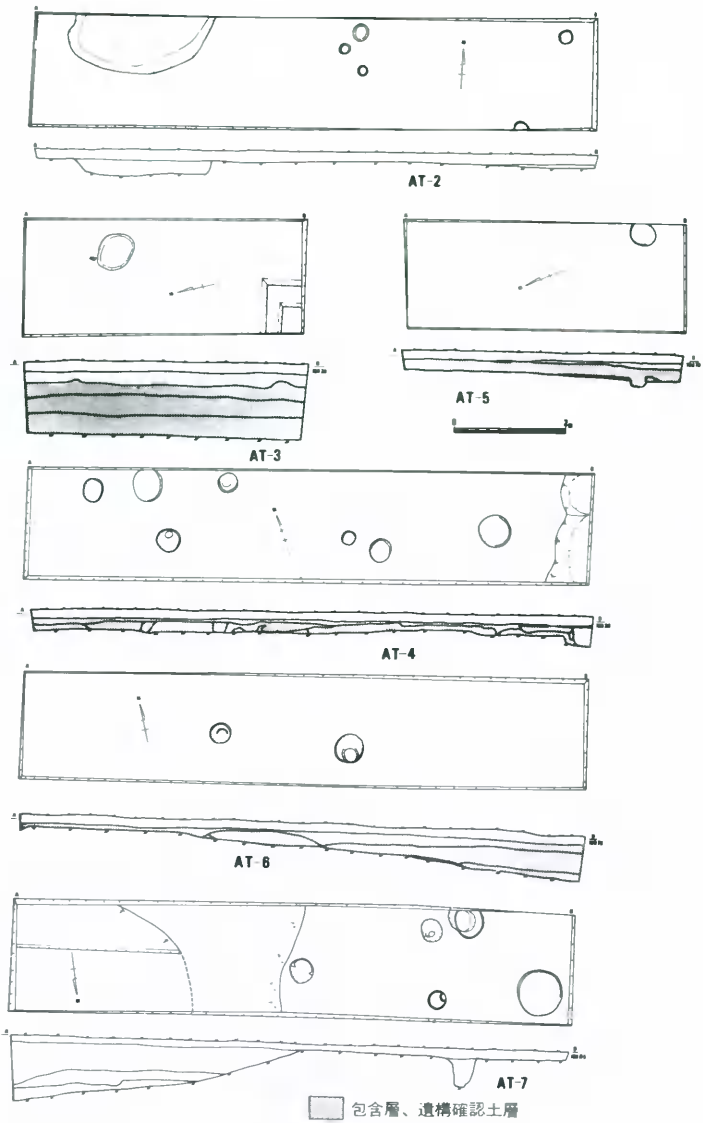
(1)　久世町史編集委員会　『久世町史』　久世町教育委員会　　昭和53年刊
昭和57年に長光寺山古墳群の発掘調査が実施された際、墳丘盛土及び周辺において多量の押型文土器が出土したが、大旦遺跡と同時期のものである。報告書近刊の予定。

(2)　例えば岡山市の百間川原尾島遺跡、加茂遺跡、倉敷市矢部南向遺跡、上東遺跡等での遺構の在り方とは全く異なっている。

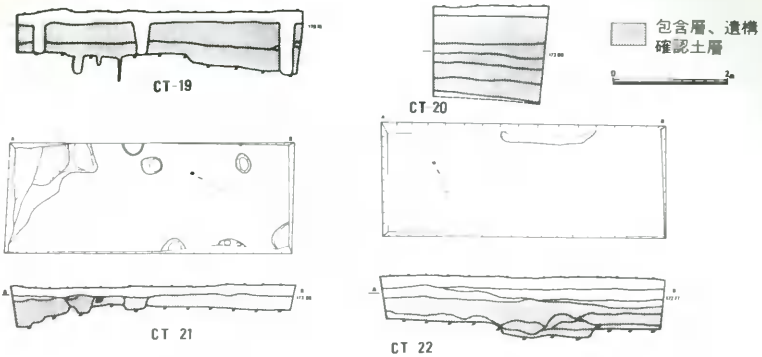
第12図　圃場整備地区内における遺跡範囲（縮尺不同）



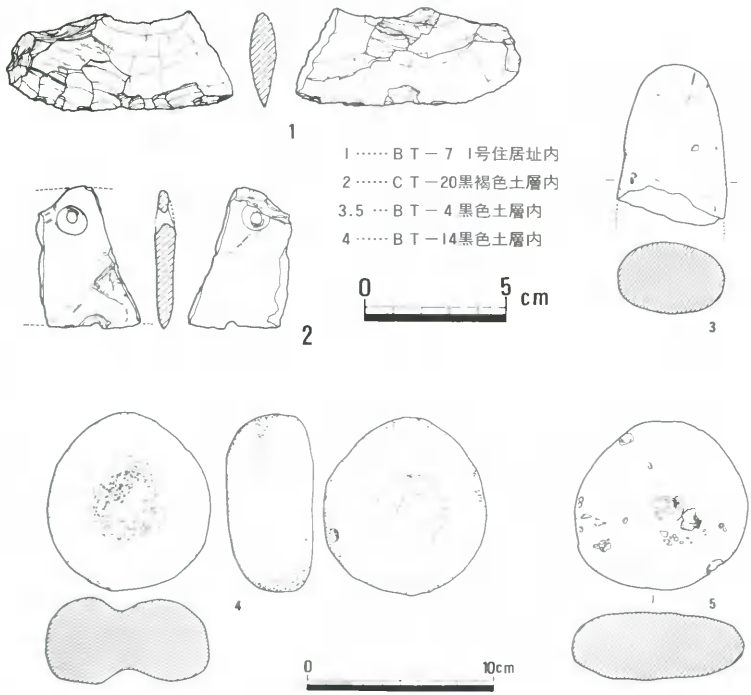
第13図　ＡＴ－８、ＢＴ－４、５、13、14、ＣＴ－16、18平・断面図（Ｓ＝$\frac{1}{100}$）



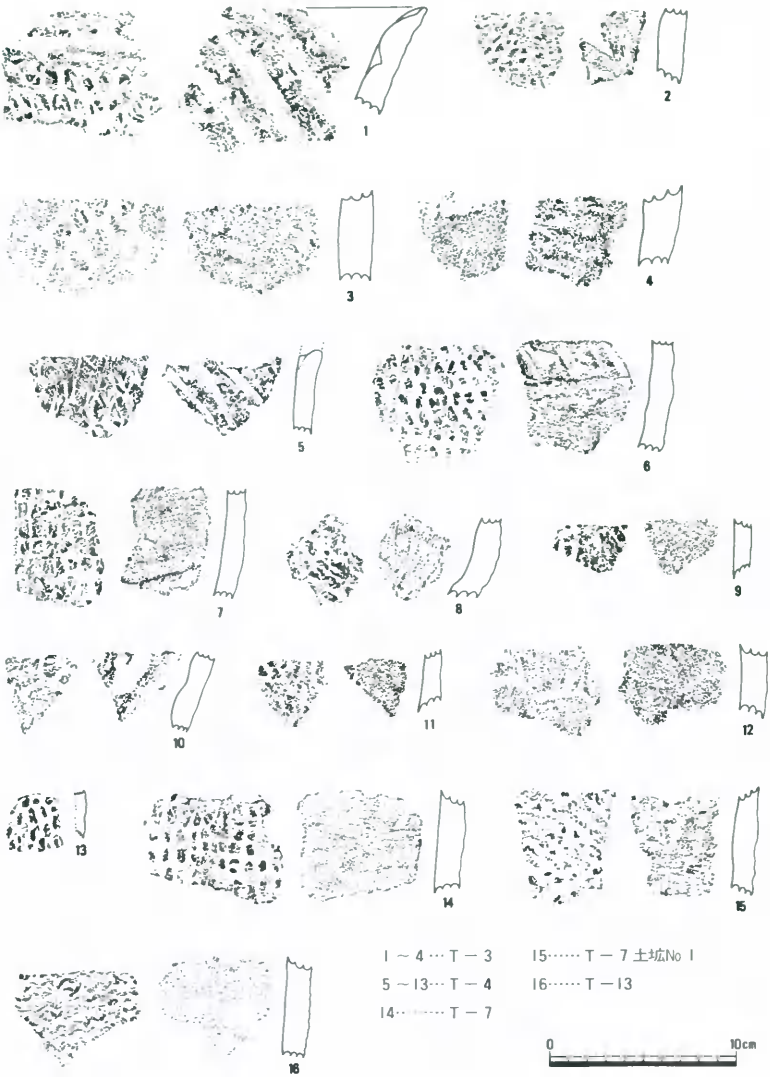
第14図　ＡＴ－２～７平・断面図（Ｓ＝$\frac{1}{100}$）



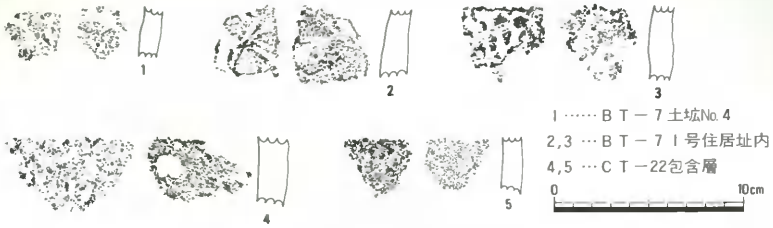
第15図　ＣＴ－19～22平・断面図（Ｓ＝$\frac{1}{100}$）



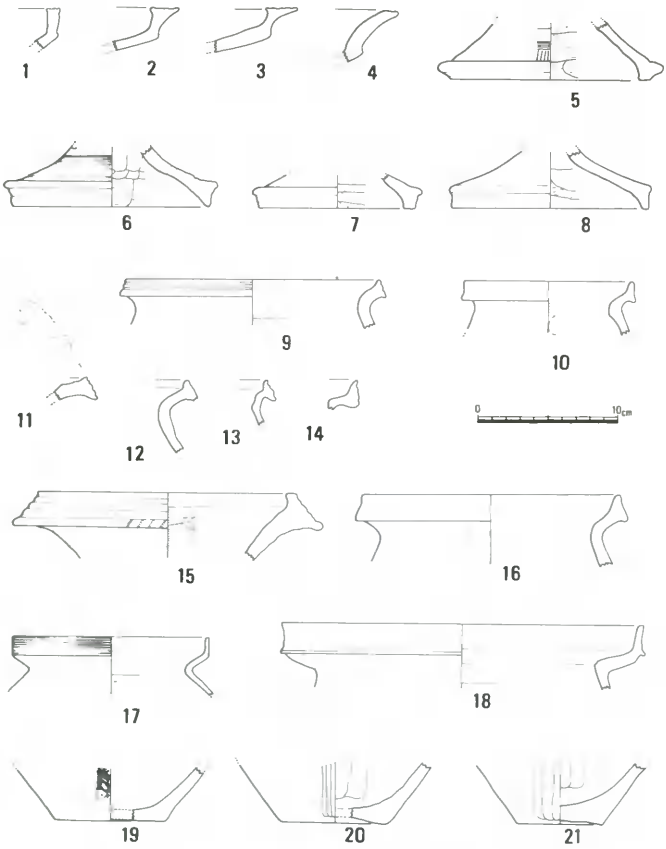
第16図　包含層出土石器（1、2…Ｓ＝$\frac{1}{2}$、3～5…$\frac{1}{3}$）



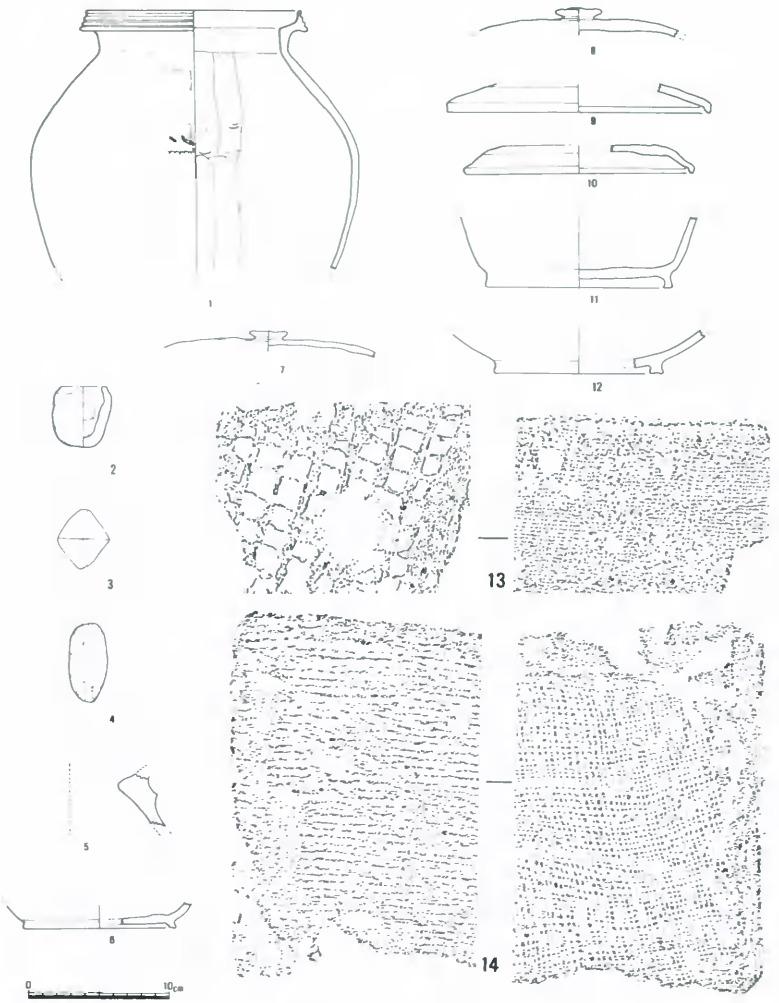
第17図　B地点出土縄文土器（S＝$\frac{1}{3}$）



第18図　Ｂ、Ｃ地点出土縄文土器（Ｓ＝$\frac{1}{3}$）



第19図　ＢＴ－３黒色土層内出土土器（Ｓ＝$\frac{1}{4}$）



1……ＢＴ－７　　4……ＢＴ－３　　11……ＣＴ－16
2,5 …ＢＴ－13　　6,7 …ＡＴ－４　　13……ＣＴ－19
3……表採、Ａ地点　8～10、12、14…ＣＴ－20

第20図　表採、包含層出土遺物
（１～12…Ｓ＝$\frac{1}{4}$、13、14…縮尺不同）

図版 1

(1) 大旦遺跡、A・B地点風景（南から）

(2) 町指定「大旦遺跡」近景（南から）

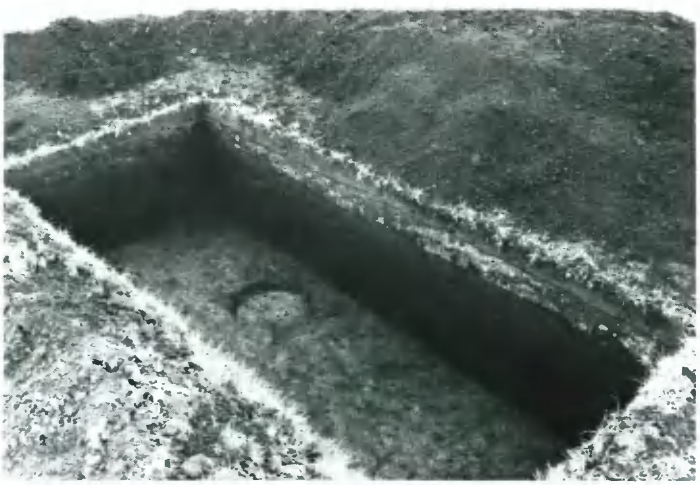
図版 2

(1) 大旦遺跡C地点遠景（北から）

(2) ATI-1遺構全景（南東から）

図版３

(1)　ＡＴ－１住居址の断面写真（西から）



(2)　ＡＴ－３全景（南西から）

図版 4

(1)　ＢＴ－７の全景（南西から）

(2)　ＢＴ－７の土坑No.２、３、４全景（東から）

図版 5

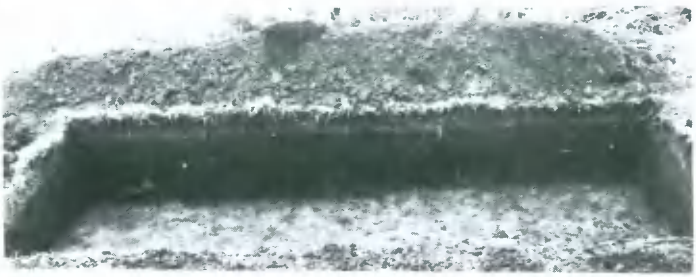
(1)　ＢＴ－３断面（北西から）

(2)　ＢＴ－４全景（南東から）

(3)　ＣＴ－17全景（南西から）

図版 6

1　ＣＴ－16全景（西から）



2　ＣＴ－18全景（北西から）

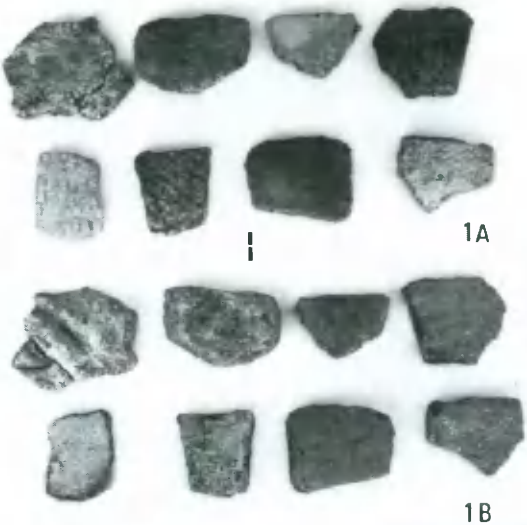
3　ＣＴ－21全景（西から）

図版 7

(1)　ＢＴ－７の１号住居址発掘風景（北から）

(2)　ＡＴ－８の埋めもどし作業風景（北から）

図版 8

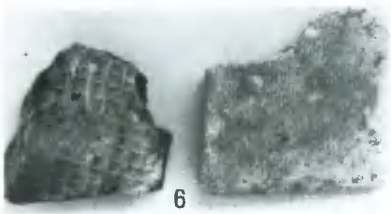


1　縄文時代早期(押型文土器)

(表)　4　ＣＴ－17凹状遺構内出土

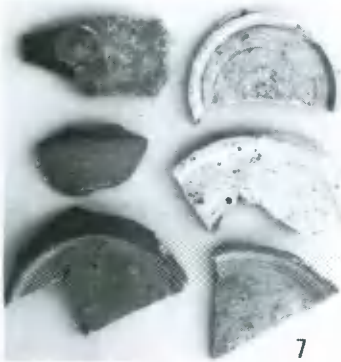
(裏)　5　ＣＴ－17凹状遺構内出土

2　ＢＴ－7出土弥生式土器



6　Ｃ地点出土平瓦

3　ＡＴ－１の住居址内出土土器



7　ＣＴ－17凹状遺構内出土

西谷遺跡

例　　言

1．本書は、岡山県教育委員会が昭和58年度国庫補助を受けて実施した、「西谷（にしだに）遺跡」の発掘調査の概要報告書である。

2．遺跡は、邑久郡長船町西須恵字西谷に所在する。

3．発掘調査は、文化課職員福田正継が担当し、昭和58年5月9日から昭和58年6月23日まで実施した。

4．本書の執筆と編集は、福田が行った。

5．発掘調査にあたっては、長船町教育委員会赤松伸咲氏の協力を得た。

6．本書に使用したレベル高は、海抜からの高さである。方位は、いずれも磁北である。

7．本書の第2図に使用した地形図は、建設省国土地理院発行の25000分の1地形図の備前瀬戸・西大寺・片上・牛窓を、貼り合せて複製したものである。

目　　次

例　言

第１章　地理的・歴史的環境 …… 39

第２章　調査の経緯 …… 45

第３章　発掘調査の概要 …… 48

第４章　まとめ …… 61

図　目　次

第１図　遺跡位置図 …… 39

第２図　西谷遺跡周辺遺跡分布図（１／25000）…… 40

第３図　西谷遺跡確認調査グリッド設定図（１／150）…… 47

第４図　No.１トレンチ実測図（１／60）…… 48

第５図　No.２トレンチ断面図（１／60）…… 48

第６図　No.２トレンチ出土遺物（１／４）…… 48

第７図　No.３トレンチ断面図（１／60）…… 49

第８図　No.３トレンチ出土遺物（１／４）…… 49

第９図　No.４トレンチ実測図（１／60）…… 50

第10図　No.４トレンチ出土遺物（１／４）…… 50

第11図　No.５トレンチ実測図（１／60）…… 51

第12図　No.６トレンチ実測図（１／60）…… 52

第13図　No.６トレンチ出土遺物（１／４）…… 52

第14図　No.７トレンチ実測図（１／60）…… 53

第15図　No.７トレンチ出土遺物（１／４）…… 53

第16図　No.８トレンチ断面図（１／60）…… 55

第17図　No.９トレンチ断面図（１／60）…… 55

第18図　No.10トレンチ断面図（１／60）…… 55

第19図　No.11トレンチ実測図（１／60）…… 55

第20図　No.12トレンチ断面図（１／60）…… 55

第21図　No.13トレンチ実測図（１／60）…… 56

第22図　No.14トレンチ断面図（１／60）…… 56

第23図　No.15トレンチ断面図（1／60）…… 56
第24図　No.15トレンチ出土遺物（1／4）…… 56
第25図　No.16トレンチ実測図（1／60）…… 58
第26図　No.16トレンチ出土遺物（1／4）…… 58
第27図　No.17トレンチ実測図（1／60）…… 59
第28図　No.18トレンチ実測図（1／60）…… 60
第29図　No.19トレンチ断面図（1／60）…… 60
第30図　No.20トレンチ断面図（1／60）…… 60
第31図　No.21トレンチ断面図（1／60）…… 60
第32図　No.21トレンチ出土遺物（1／4）…… 60

図　版　目　次

図版1—1　西谷遺跡遠景（南西から）…… 63
2　西谷遺跡遠景（南西から）…… 63
図版2—1　西谷遺跡遠景（西の桂山中腹から）…… 64
2　須恵廃寺遠景（北西の桂山中腹から）…… 64
図版3—1　No.4トレンチ（北から）…… 65
2　No.6トレンチ（北から）…… 65
図版4—1　No.5トレンチ（北から）…… 66
2　No.7トレンチ（東から）…… 66
図版5—1　No.16トレンチ（北から）…… 67
2　No.18トレンチ（北から）…… 67
図版6—1　No.1トレンチ、No.2トレンチ遺構確認調査状況（北西から）… 68
2　No.1トレンチ、No.3トレンチ遺構確認調査状況（南西から）… 68
図版7—1　西谷遺跡出土遺物（1）…… 69
2　西谷遺跡出土遺物（2）…… 69
図版8—1　西谷遺跡出土遺物（3）…… 70
2　西谷遺跡出土遺物（4）…… 70

第１章　地理的・歴史的環境

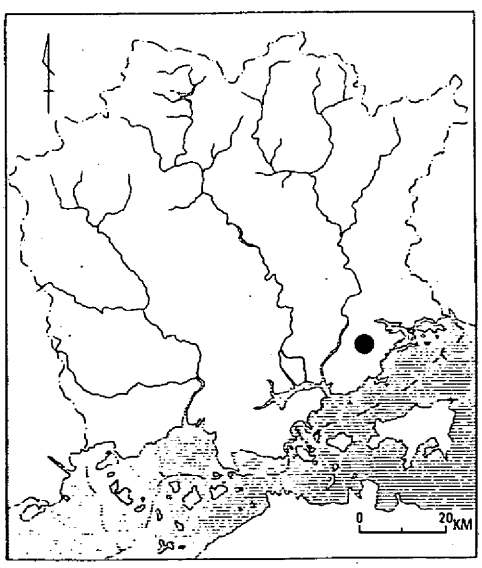
西谷遺跡は、邑久郡長船町西須恵字西谷に所在する。

高梁川及び旭川とともに岡山県の三大河川のひとつである吉井川は、兵庫県に面した岡山県東部を中国山地から津山盆地を経て瀬戸内海に流れる。この吉井川は、熊山山塊に突き当って蛇行しながら岡山市と邑久郡の境界地点に至り、川の幅が広くなって流れも緩やかになる。

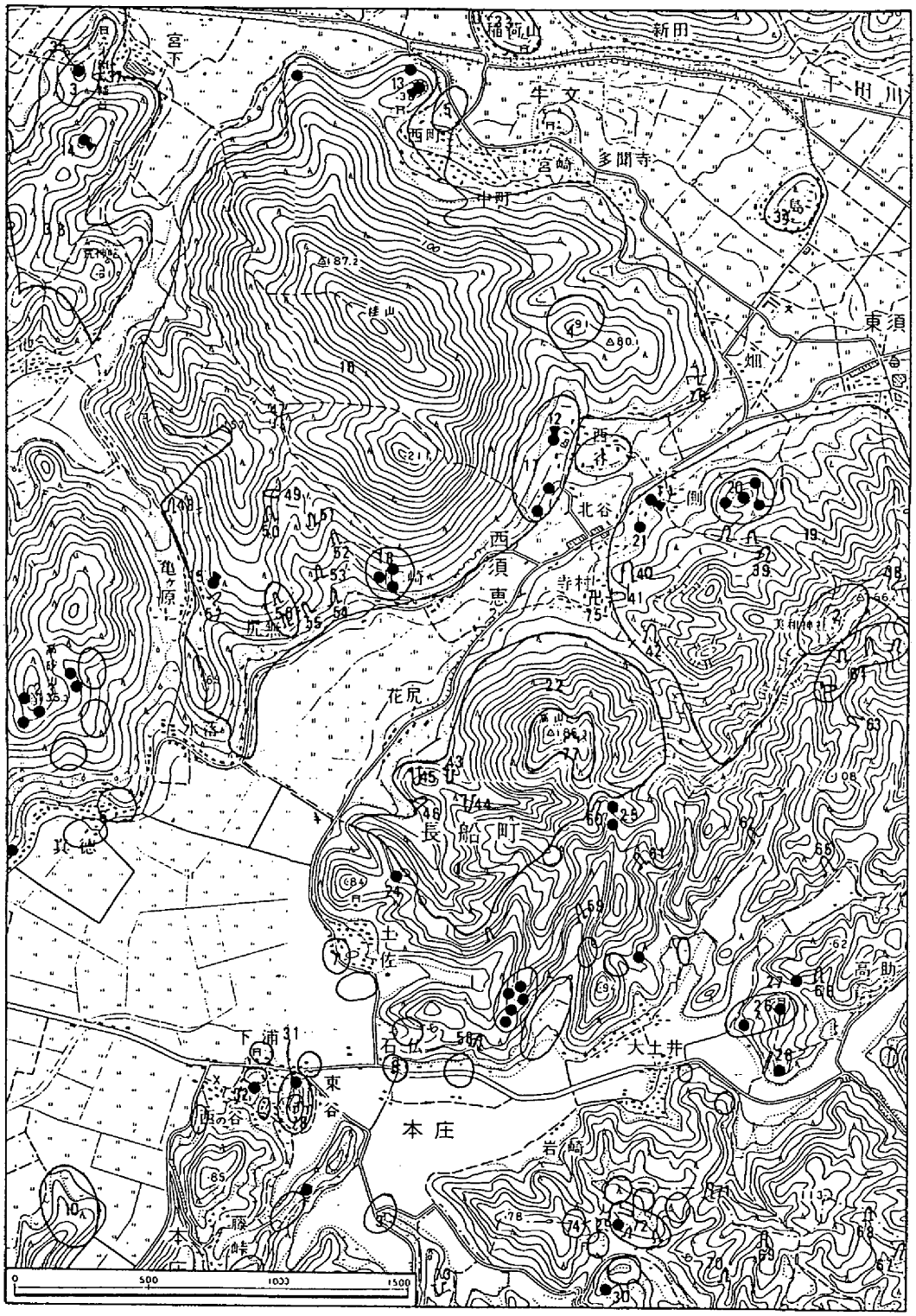
吉井川下流の左岸に位置する長船町から邑久町の地域は、肥沃な沖積平野が展開し、県内でも指折りの穀倉地帯になっている。その平野のほぼ中央部には、比較的急峻な甲山、高砂山、桂山の独立丘陵が所在し、さらに東方には、高山、広高山、四辻山の山々が連なって、長船町と邑久町が境を接している。西谷遺跡は、桂山と広高山に挟まれた細長い谷間に位置する。

西谷遺跡の東脇に山麓をかすめて建設された県道備南牛窓線を北東に進み、さらに千田川上流の佐山の集落を抜けて溯ると、約８㎞で備前市鶴海の海岸に到達する。東須恵の集落から左折して桂山の北麓を西に行けば、約６㎞で長船町土師に至る。逆に県道を南西に向えば、約７㎞で牛窓町の錦海塩田跡地である。東備西播開発有料道路の邑久インターチェンジの位置する邑久町本庄字石仏で、右折すると約３㎞で邑久町尾張であり、左折すると風光明媚な瀬戸内海に面した尻海や虫明の漁村に通じている。

西谷遺跡の所在する地点は、南に面した緩斜面になっている。北から西にかけては桂山の山裾まで畑地が広がり、南から東は階段状を呈する水田になっている。この西谷遺跡の位置から広高山西麓に点在する側の集落にかけては、標高約12ｍを測る低い峠で、北東に下るとやや広い盆地に出る。美和小学校から飯井の集落までの水田は整然と並んでいるが、盆地の西端に位置する牛文地内になると不規則で深い水田が多い。また盆地の中央部に存在する独立丘陵の地名が「島」であり、「新田」という地名も認められるから、この盆地は湿地帯であった可能性が強い。西谷遺跡の南西方向は南に開口した細長い谷地形で、ほぼ中央部を縦貫するように西谷の集落を経て千町川に合流する小川が流れている。この小川の



第１図　遺跡位置図



第２図　西谷遺跡周辺遺跡分布図（１／25000）

流域には、邑久町の尾張や山田庄に認められる短冊形をした条里の跡は存在しない。また地元に住む古老の話によると、県道備南牛窓線の建設工事で矢板を打っても止まらなかったというから、この地域も以前は湿地であったことが推定される。地名に「水落」や「下浦」などが存在するのも、そのことを裏付けているのではなかろうか。

西谷遺跡の周辺には、著名な遺跡が数多く知られている。

南東に位置する広高山頂部の美和神社境内付近は、ポイント、ナイフ、スクレーパーなどのサヌカイト製石器が９点も採集された旧石器時代の遺跡である。吉井川の対岸に位置する銅鐸出土地の百枝月遺跡でも、旧石器時代の石器が採集されて邑久町郷土資料館に展示されているが、遺跡の内容は明らかでない。

縄文時代になると、平野部縁辺の丘陵裾部に貝塚が形成される。縄文時代前期を主体とする大橋貝塚（註１）は、昭和53年に河川改修に伴って発掘調査が実施され、貝層内から人骨や多量の土器が出土している。甲山の南麓には爪形文土器が採集された宮下貝塚（註２）が知られているが、詳細は不明である。

弥生時代になると、爆発的に遺跡の数が増加する。

「弥生時代前期の貝塚」として岡山県を代表する標識遺跡の門田貝塚（註３）では、弥生時

1．西谷遺跡	2．広高山遺跡	3．木鍋山遺跡	4．西谷奥遺跡	5．牛文遺跡
6．真徳貝塚	7．土佐貝塚	8．石仏貝塚	9．長谷口貝塚	10．扇ヶ端貝塚
11．築山古墳	12．西谷古墳	13．牛文茶臼山古墳	14．土師茶臼山古墳	15．金鶏塚古墳
16．桂山古墳群	17．西谷古墳群	18．亥子田古墳群	19．広高山古墳群	20．マタジ山古墳群
21．側古墳群	22．高山古墳群	23．真徳古墳群	24．夫婦岩古墳	25．石仏山古墳群
26．鳥居下古墳群	27．宮山裏の溺古墳	28．八幡宮古墳	29．寒風古墳	30．中山古墳
31．向山古墳	32．国司山古墳	33．稲荷山古墳群	34．島古墳群	35．木鍋山１号墳
36．土師茶臼山古墳群	37．木鍋山１号窯跡	38．新山窯跡	39．摺鉢窯跡	40．北谷窯跡
41．西の奥窯跡	42．どうかん窯跡	43．花尻窯跡	44．高山窯跡群	45．青山窯跡
46．花尻南窯跡	47．桂山林道峠窯跡	48．亀ヶ原北窯跡	49．亥子田池尻窯跡	50．亀ヶ原窯跡
51．亥子田池尻窯跡	52．比丘尼岩下窯跡	53．亥子田東谷窯跡	54．亥子田谷窯跡	55．尻無窯跡
56．高山窯跡群	57．亀ヶ原西窯跡	58．猪のかき窯跡	59．佐井田古窯	60．佐井田谷窯跡
61．かんにゃくは窯跡	62．構谷窯跡	63．ばかぜ窯跡	64．新山窯跡群	65．さざらし窯跡
66．大土井南貝塚	67．土橋窯跡	68．流尾窯跡	69．平田窯跡	70．かべら窯跡
71．切明窯跡	72．寒風窯跡群	73．古市村窯跡	74．寒風笹場池北遺跡	75．須恵廃寺跡
76．大聖寺跡	77．高山城跡	78．殿山城跡		

代前期の遺構や遺物以外に、弥生時代中期から中世に至る継続した長期間に及ぶ遺構や遺物も検出されている。この門田貝塚の調査結果のように、弥生時代以降に属する多くの遺構が複合して存在する状況は、邑久町の社会福祉施設や公民館の建設に伴って事前に発掘調査が行われた助三畑遺跡（註４）でも認められ、多量の貴重な遺物が出土している。さらに宅地造成や駐車場の拡張工事に伴って発掘調査が実施された畑中遺跡（註５）や月ノ木遺跡（註６）では、短期間の小規模な発掘調査であったにもかかわらず、溝や土壙が検出されて重要な資料を得ている。このように邑久町の沖積平野に所在する遺跡の知見は蓄積されつつあるが、西谷遺跡に近接した地域の弥生時代に属する遺跡は、ほとんど知られていない。

発掘調査が行われてその性格が明らかにされた遺跡として、長船町土師字宮下に所在した木鍋山遺跡（註７）がある。長船町総合グランドの建設に伴うもので、15軒以上の竪穴住居址が検出されている。西谷遺跡の北に位置する丘陵上の西谷奥遺跡は、石器が採集されただけである。丘陵裾部に所在する牛文遺跡や真徳貝塚からは、土器片やサヌカイトの剝片が検出されている。また邑久町本庄の平野部縁辺に面した丘陵裾部にも土佐貝塚、石仏貝塚、長谷口貝塚などが点在するが、いずれも貝層から石器や土器片が採集されただけで、遺跡の内容は不明である。舌状に張り出した丘陵の斜面に存在する扇ケ端貝塚も、土器やサヌカイトの破片が散布しているだけである。

古墳時代になると、丘陵の頂部や先端部に前方後円墳が築造されている。この西谷遺跡の周辺は、前方後円墳が比較的多く存在する地域である。古い時期に盗掘を受けたものが多く、特異で貴重な副葬品の多くは、東京国立博物館に所蔵されている（註８）。

西谷遺跡に近接した広高山の山裾には、全長約90ｍを測る岡山県指定史跡になっている築山古墳（註９）が存在する。竪穴式石室に納められていたと推定される家形石棺が露呈し、埴輪片が散在している。西谷遺跡の西方向に位置する緩斜面には、陶棺の破片が出土した小規模な前方後円墳が存在するというが、詳しいことは不明である。長船町牛文の平野に面して舌状に張り出した丘陵上には、前方部の短い全長約55ｍを測る牛文茶臼山古墳（註10）が知られている。竪穴式石室は盗掘され、半円方形帯神獣鏡や金銅製獅噛文帯金具などの豪華な遺物以外に、多くの鉄器や土器が出土したという。長船町総合グランドの裏山頂部に所在する土師茶臼山古墳も、前方部の短い前方後円墳である。墳丘から土師質の埴輪が採集されている（註11）。桂山南麓の丘陵尾根上には、長さ約3.6ｍ・幅約3.6ｍの横穴式石室を内部主体にもつ金鶏塚古墳（註12）と呼ばれる前方後円墳が存在する。環頭柄頭や馬鐸などの珍品以外に、多量の副葬品が出土している。

前方後円墳以外の古墳は、狭い地域に数多く密集して存在する。長船町全域の遺跡分布調査がほとんど行われていないこともあって、丘陵全体を線で結んで古墳群が所在することを提示

している状況であるため、古墳そのものの確実な数や位置は把握できない。

西谷遺跡周辺の丘陵上や山裾には、桂山古墳群、広高山古墳群、高山古墳群、真徳古墳群などが周知されているが、これらの古墳群にはいずれも20基以上の古墳が確認され、広大な面積を有する桂山古墳群では約100基にも及ぶというが、その実態は明らかではない。これらの古墳の形態はいずれも円墳で、内部主体は横穴式石室のものが多い。

土師茶臼山古墳の所在する丘陵には、約50基にも及ぶ古墳が存在するが、いずれも箱式石棺が内部主体で、墳丘の形態は盛土の少ない方墳になるものが多く、西谷遺跡の周辺で確認されている多くの円墳からなる古墳群とは立地状況が異なり、構築された時期も古いようである。

同じ丘陵に所在して発掘調査が実施された木鍋山遺跡では、5世紀末から6世紀初頭に属する古式の須恵器などが出土した19基の溝状埋葬遺構が検出されている。

この地域の遺跡で特筆しなければならないのは、備前市と邑久郡に跨る広い範囲に、約100基にも及ぶと推定される窯跡が分布する、邑久窯跡群（註13）が丘陵の斜面に群集して存在することである。恵まれた陶土と燃料に使う薪材が容易に入手できたこともあって、古墳時代後半期から急激で爆発的に須恵器を生産する窯が構築され、平安時代末期まで操業が継続されている。さざらし奥池窯跡の製品のように、整形や焼成が極めて優秀なものも認められ、平城宮跡の発掘調査でも、この地域で生産されたと推定される須恵器が出土している（註14）。

近年になって発掘調査が実施された窯跡に、新林（宮嶺）窯跡（註15）、奥更谷窯跡(註16)、寒風窯跡群（註17）、木鍋山1号窯跡（註18）などがあり、盗掘という不測の事態に直面した土橋窯跡（註19）では、掘り出された須恵器が回収された。

窯跡以外の遺跡として、寒風窯跡群と密接な関係がある寒風笹場池北遺跡（註20）と、4棟の建物と柵列が検出された佐山丸山遺跡（註21）がある。

西谷遺跡の南方約500mに位置する「寺村」という地名が残っている扇状の谷間には、備前で最も古いと推定される瓦（註22）が出土している須恵廃寺（註23）が所在し、長船町服部に所在する服部廃寺（註24）とともに岡山県南東部を代表する著名な寺院跡で、須恵器生産を掌握していた支配者の富と権力を誇示していたことがうかがわれる。

中世になると、備前市伊部から熊山南麓地域を中心に、須恵器生産の伝統を継承して備前焼が興隆する。この社会変化に呼応して、西谷遺跡の周辺も発展的に変容したことが推察され、国宝『一遍上人絵伝』に描写されている「福岡の市」（註24）の情景のように繁栄していたことが推察される。

このように西谷遺跡が所在する吉井川下流の左岸地域は、特徴のある重要な遺跡が数多く存在し、旭川や高梁川などの下流地域とともに、「吉備国」の中枢的な位置を占めていたと考えられるのである。

註

（註１）岡本寛久「大橋貝塚発掘調査報告書」『岡山県埋蔵文化財報告』9　岡山県教育委員会　1979年

（註２）瀬戸内考古学会編集部編「瀬戸内地区押型文土器出土遺跡地名表」『瀬戸内考古学』創刊号　瀬戸内考古学会　1957年

（註３）岡田博「門田貝塚」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』55　岡山県教育委員会　1983年

（註４）昭和57年１月から９月にかけて、岡山県教育委員会と邑久町教育委員会が発掘調査を実施した。

（註５）平井泰男「畑中遺跡確認調査」『岡山県埋蔵文化財報告』12　岡山県教育委員会　1982年

（註６）馬場昌一『月ノ木遺跡発掘調査概要――パチンコマンモス露天駐車場の拡張に伴う擁壁部分の発掘調査――』　邑久町教育委員会　1983年

（註７）江見正己「木鍋山遺跡発掘調査」『岡山県埋蔵文化財報告』11･12　岡山県教育委員会　1981･1982年

（註８）本村豪章「古墳時代の基礎研究稿――資料篇（１）――」『東京国立博物館紀要』第16号　東京国立博物館　1980年

（註９）間壁葭子「築山古墳」『岡山県大百科事典』下　山陽新聞社　1980年

（註10）梅原末治「岡山県下の古墳調査記録２」『瀬戸内海研究』９・10　瀬戸内海総合研究会　1954年

（註11）高畑知功氏のご教示による。

（註12）註８に同じ。

（註13）西川宏・間壁忠彦「備前の古窯」『古代の日本』４　角川書店　1970年

（註14）小笠原好彦・西弘海・吉田恵二「土器」『平城宮発掘調査報告』Ⅶ　奈良国立文化財研究所　1976年

（註15）伊藤晃『新林（宮嶋）窯址の調査報告』　邑久町教育委員会　1974年

（註16）葛原克人『奥更谷古窯址の調査報告』　邑久町教育委員会　1975年

（註17）山磨康平「寒風古窯址群」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』27　岡山県教育委員会　1978年

（註18）註７に同じ。

（註19）岡田博「土橋窯址出土遺物について」『岡山県埋蔵文化財報告』13　岡山県教育委員会　1983年

（註20）江見正己「寒風笹場池北遺跡発掘調査報告」『岡山県埋蔵文化財報告』12　岡山県教育委員会　1982年

（註21）井上弘「佐山丸山遺跡」『岡山県埋蔵文化財報告』12　岡山県教育委員会　1982年

（註22）出宮徳尚『特別展吉備の古代瓦』　岡山市教育委員会・岡山市立オリエント美術館　1980年

（註23）間壁葭子「須恵廃寺」『岡山県大百科事典』上　山陽新聞社　1980年

（註24）三好基之「中世備前焼の交易」『海底の古備前――水ノ子岩学術調査記録――』　山陽新聞社　1978年

第2章　調査の経緯

長船町では、農業の近代化や合理化を図る目的で、各地で圃場整備事業が行われつつある。西須恵の西谷地区でも、地元の地権者による団体営の圃場整備事業が計画され、約10haの畑地と水田が造成工事の対象になった。

この地域では、寺村の集落が所在する地点は、「古代寺院跡」として住民に広く周知されているが、桂山の東方に位置する山裾では、墳丘や横穴式石室が存在する古墳は知られているものの、畑地や水田については遺跡がまったく周知されていなかった。しかし、邑久窯跡群の中心地であり、岡山県指定史跡の築山古墳に近接する地区であるため、圃場整備事業計画が立案された段階の昭和57年12月上旬に現地踏査を行った結果、事業計画範囲の北側に位置する緩斜面で、須恵器の小破片が多量に散布していることを確認した。

岡山県教育委員会では、遺跡の保護・保存の対策を講ずるための基礎資料を得るため、圃場整備事業が行われる以前に、岡山県教育委員会が昭和58年度国庫補助を得て発掘調査を実施することになった。

昭和58年４月20日に地権者へ発掘調査の概要を説明したところ、発掘調査を実施することを承諾し、現場での発掘作業に協力していただけることになった。

発掘調査は、昭和58年５月９日から６月23日まで実施した。遺構が存在することが確認され、遺跡の状況がほぼ把握できるようになった段階に、岡山県教育委員会、長船町耕地課、長船町教育委員会、地元地権者代表の４者で遺跡の取り扱いについて協議を行った結果、遺構が確認された地点は圃場整備事業対象地の中央に位置し、面積も比較的広いことから、設計変更を施しても保存できないという結論に達したため、遺跡が存在すると推定される範囲全体について、長船町の費用で記録保存のための発掘調査を実施することになった。

調査にあたっては、地元地権者代表岡田富行氏をはじめ、長船町耕地課、長船町教育委員会等関係各位に多大のご協力を得た。記して厚くお礼申し上げます。

調査体制

岡山県教育庁文化課

課長　早田憲治　　課長代理　橋本泰夫　　課長代理　吉本唯弘

課長補佐　河本　清　　主任　遠藤勇次　　文化財保護主事　福田正継（調査担当）

調査作業員

岡田　泉　北谷乾太郎　北谷達志　北谷兵太郎　木村利夫　重康　広　山本才五郎

岡田澄子　岡田房子　岡田安子　木村末子　橋本松枝　山形千里　雪上八重子

日誌抄

5月9日(月)　西谷遺跡の発掘調査に必要な器材を運搬する。
長船町教育委員会と発掘調査の進め方について協議する。

10日(火)　仕事着手前のあいさつを行い、作業上の注意を伝える。
T—1、2を掘り下げる。
T—1の土層断面を実測する。

11日(水)　T—3～6を掘り下げる。
T—1、2の写真撮影を行う。
T—1の実測を行う。
T—4、6で遺構を検出し、多量の土器が出土する。

12日(木)　T—7を掘り下げ、遺構を検出する。
T—3、4の写真撮影を行う。
T—2～4の実測を行う。

13日(金)　T—8～10を掘り下げる。
T—5、6の写真撮影を行う。

14日(土)　T—11～13を掘り下げる。
T—8～10の写真撮影を行う。

17日(火)　T—14～17を掘り下げる。

18日(水)　T—9～13の写真撮影を行う。
T—9～13の実測を行う。

19日(木)　岡山県教育委員会、長船町耕地課、邑久町教育委員会、地元地権者代表の4者で、遺跡の取り扱いについて協議する。

20日(金)　T—20、21を掘り下げる。
T—15～21の写真撮影を行う。

21日(土)　T—14～16の実測を行う。
午後には文化課職員の応援を得て、T—17～21の実測を行う。
長船町耕地課職員によって、確認調査のグリッド配置図を作成する。

23日(月)　本日より、遺跡の存在する範囲全体の全面発掘調査を行う。
機械による表土除去作業に着手する。

25日(水)　表土除去作業を行った地点に、グラウンドシートを掛ける。
遺構検出作業を始める。

31日(火)　中世の建物を検出する。

6月1日(水)　柱穴列と土壙を検出する。

2日(木)　古墳時代の建物を検出する。

3日(金)　奈良時代の建物を検出する。

4日(土)　不整形で巨大な土壙を検出し、奈良時代の須恵器が多量に出土する。

6日(月)　不整形土壙の調査を継続する。

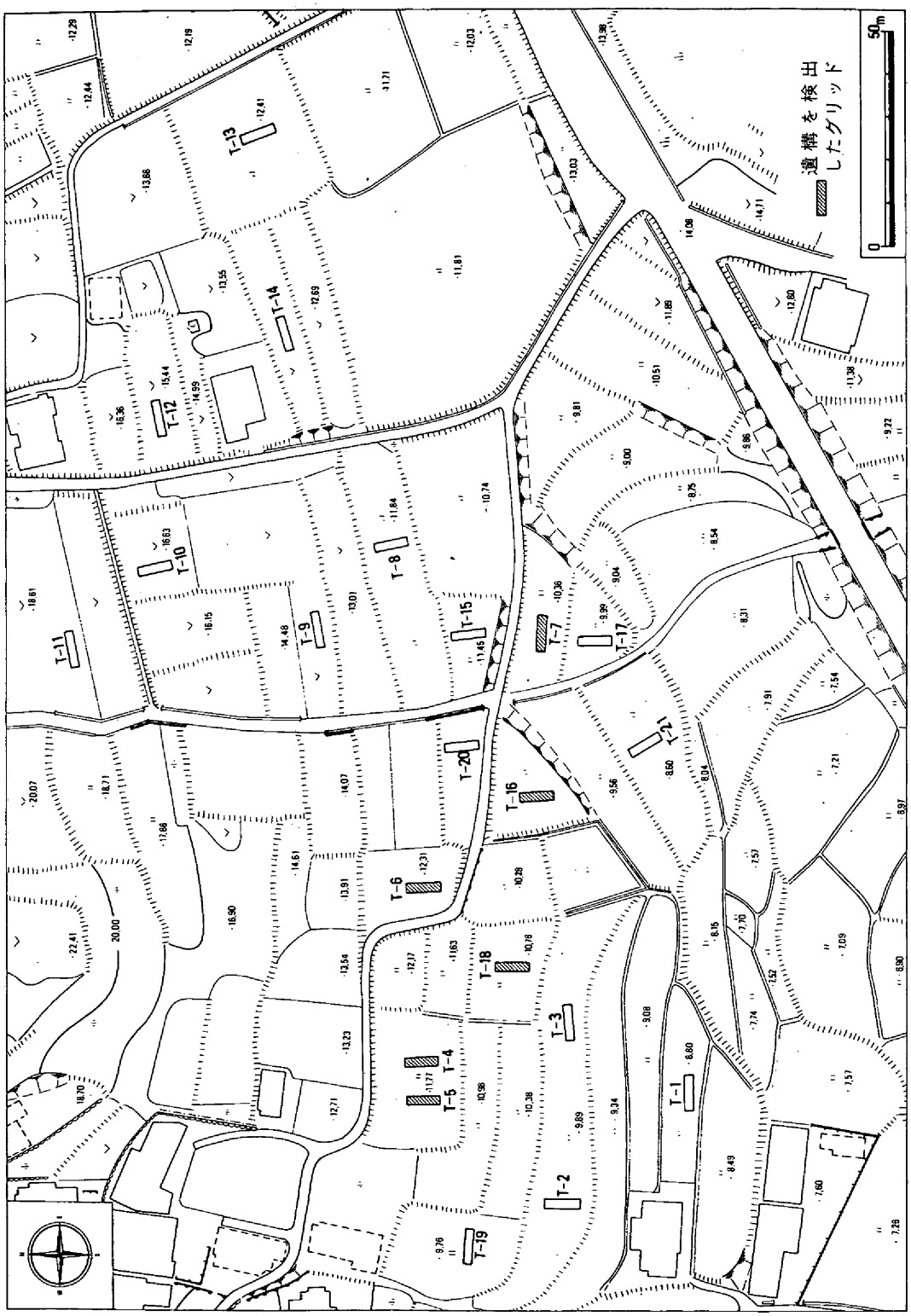
11日(土)　中世の集石土壙を検出する。

14日(火)　長船町耕地課職員によって、地形測量を始める。

20日(月)　出土土器の洗浄作業を始める。
調査範囲全体の全景写真撮影を行う。

22日(火)　道具の運搬作業の準備を行う。

23日(火)　西谷遺跡の発掘調査に使用した道具と出土遺物を運搬する。



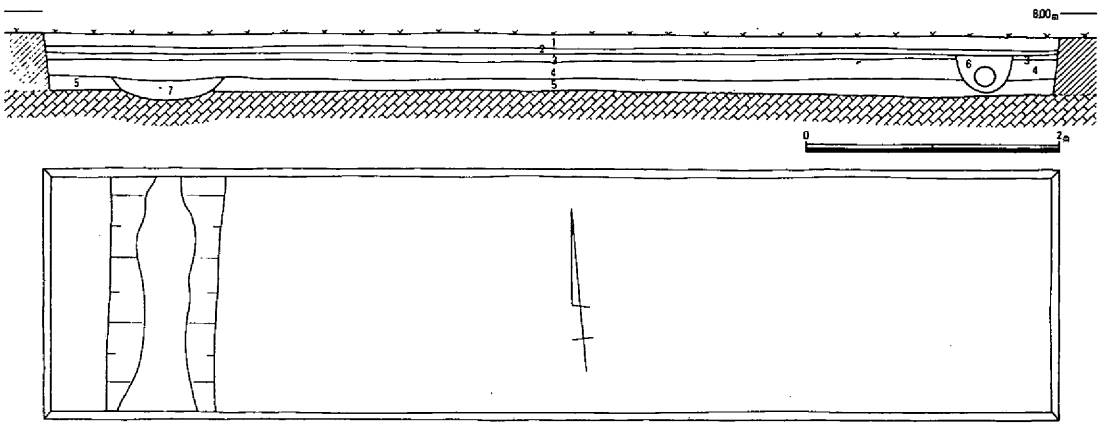
第3図　西谷遺跡確認調査グリッド設定図（1／150）

第３章　発掘調査の概要

西谷遺跡の発掘調査は、圃場整備事業が計画されている約10ha部分の現地踏査を行い、土器片の散布が認められた北側に位置する約５haの範囲を対象にした。この地点は南に面した緩斜面で、階段上になった畑地と水田である。

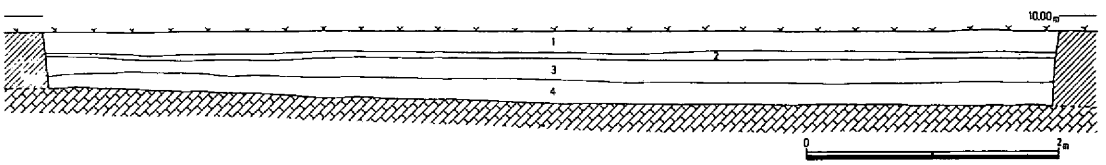
発掘調査の方法は、２ｍ×４ｍのトレンチを21か所に設定して行った。検出した遺構は、その性格や年代が把握できない場合にだけ、部分的に掘り下げるのを原則とし、遺構を検出できない場合は、基盤層まで掘り下げて土層堆積を確認した。以下、その概要を記したい。

１．黒灰褐色砂質土　２．灰褐色砂質土　３．酸化鉄・マンガン　４．灰茶褐色砂質土
５．灰褐色土　６．暗渠排水路　７．暗灰褐色砂質土

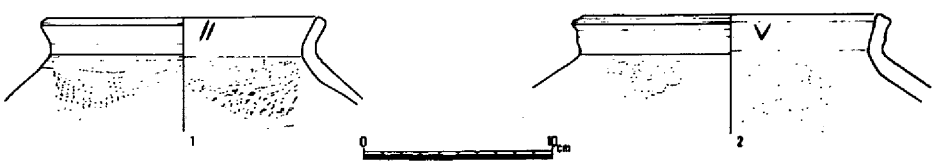


第４図　No.１トレンチ実測図（１／60）

１．黒灰褐色砂質土　２．酸化鉄・マンガン　３．灰茶褐色砂質土　４．灰褐色土



第５図　No.２トレンチ断面図（１／60）



第６図　No.２トレンチ出土遺物（１／４）

No.1 トレンチ（第4図）

発掘調査を実施した範囲の南西端に位置する。この地点より南側は、急激に低くなって土器片の散布は認められない。トレンチの西に寄った部分で、灰褐色土層を切って幅80～90cmを測る溝を検出したが、溝内の暗灰褐色砂質土内より近世の染付椀の小破片が出土したため、新しい時期の水田に伴う排水溝と判断した。

出土遺物としては須恵器、土師器、円筒埴輪などがあるが、いずれも水田耕土層直下の灰褐色砂質土から流れた状態で出土したもので、小破片のために図化することができなかった。

No.2 トレンチ（第5図）

民家の北側の海抜9.89mを測る水田に設定したトレンチで、調査範囲の西端に位置する。表土面から基盤層まで45～60cmを測り、土砂が水平堆積しているだけで遺構は存在しなかった。

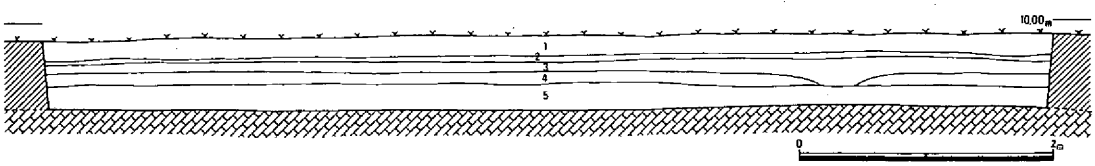
出土遺物としては須恵器や土師器の破片以外に備前焼擂鉢の小片もあるが、いずれも表土面に近い位置から出土したもので、図化することができたものは甕の2個体（第6図）だけである。どちらも内面の口縁部に箆記号を有し、焼成は悪くて黒灰色を呈している。

No.3 トレンチ（第7図）

No.2トレンチと同じレベルの水田に、約45m東に移って東西方向に設定した。トレンチの東に寄った地点で、下位の酸化鉄とマンガンの層が切られている部分を確認したが、新しい時期の水田に伴う溝と考えられた。

出土遺物のほとんどが須恵器の破片であるが、円筒埴輪の小片も存在する。いずれも水田の耕土と灰茶褐色砂質土から出土したもので、二次堆積のものばかりである。掲載した遺物（第8図）は須恵器の杯ばかりで、いずれも貼付けの高台が認められる。3は口径や器高が小さい約1/8ほどの破片で、外面には自然釉の付着が顕著である。

1．黒灰褐色砂質土　2．酸化鉄・マンガン　3．灰茶褐色砂質土　4．酸化鉄・マンガン
5．灰褐色土



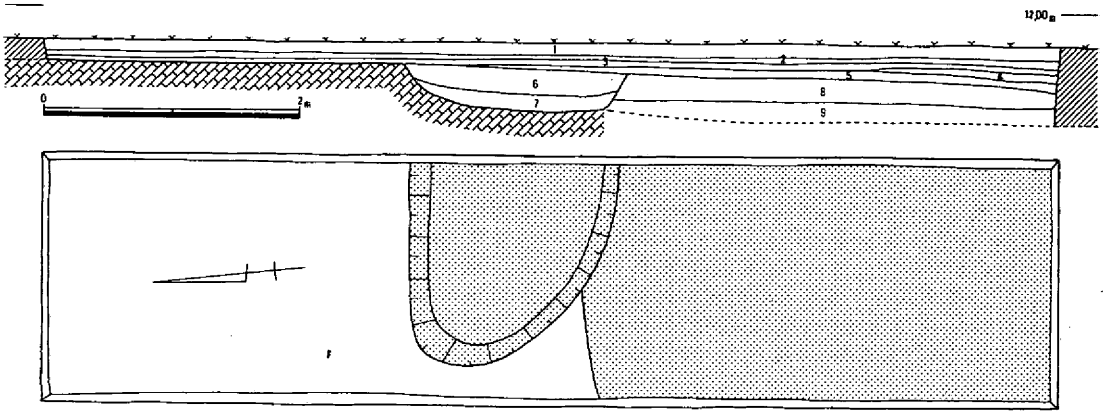
第7図　No.3 トレンチ断面図（1／60）

第8図　No.3 トレンチ出土遺物（1／4）

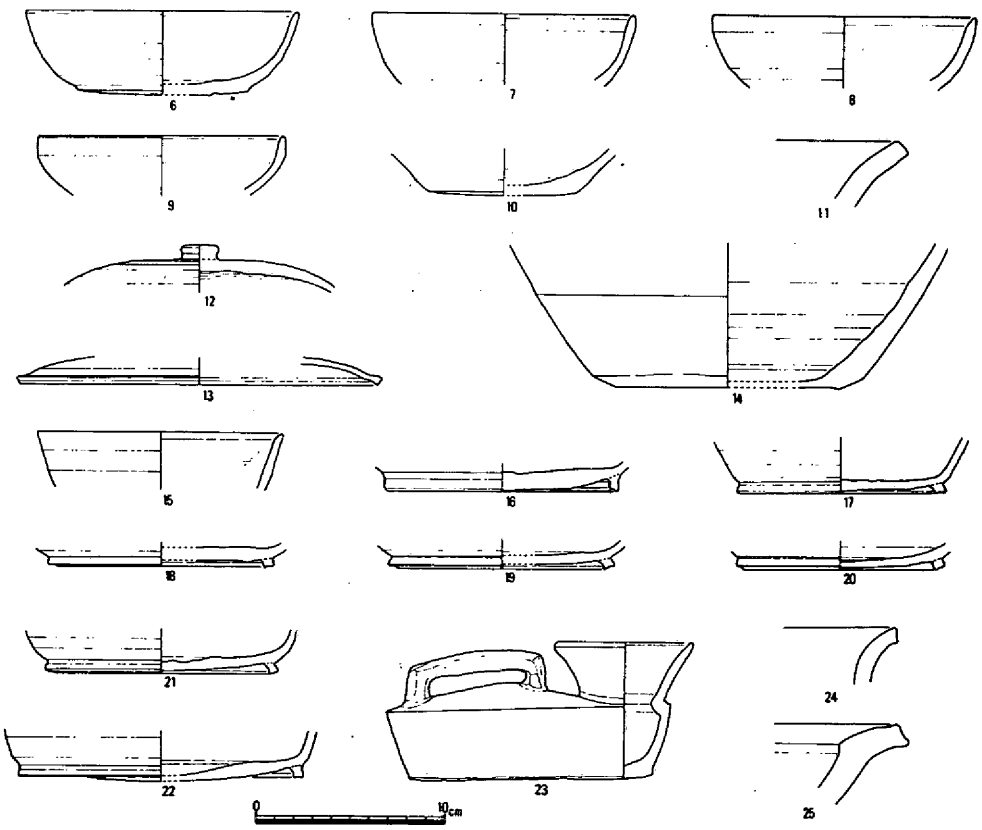
1．黒灰褐色砂質土　2．灰褐色砂質土　3．酸化鉄・マンガン

4．黄褐色・灰褐色・黒褐色等混合粘質土　5．灰褐色土　6．暗褐色砂質土

7．黄褐色粘質土　8．暗茶褐色砂質土　9．黒褐色土



第9図　No.4 トレンチ実測図（1／60）



第10図　No.4 トレンチ出土遺物（1／4）

No.4 トレンチ（第９図）

県道備南牛窓線と西谷の集落を結ぶ町道の南側に位置する。町道とトレンチを設定した水田面には約１ｍの高低差が認められ、町道の法面の下端部は、著しく削平されていると推定された。トレンチの北端部分では、表土面から基盤層まで約30cmと浅かったが、中央部から南端部分では、50cm以上も掘り下げても基盤層に到達しなかった。壁面の土層断面を観察すると、北端部分では存在しなかった暗茶褐色砂質土や黒褐色土が認められ、多量の土器も含まれていることから、遺構が存在することが判明した。遺構の性格を把握するため、壁面に沿って部分的に掘り下げたところ、中央部で暗褐色砂質土と黄褐色粘質土が堆積する「Ｕ」字形の断面を検出した。この遺構は、浅い溝か土壙になると推定された。

出土遺物（第10図）は須恵器と土師器で、黒褐色土内から出土したものが多い。ほとんどが破片であるが、23の平瓶のように完形に近い状態にまで復元できたものもある。６～10は高台をもたない須恵器の杯、11は甕の口縁部破片、12と13は杯蓋、14は鉢の底部、15～22は高台を有する杯、24は土師器の甕、25は土師器の鍋の口縁部である。

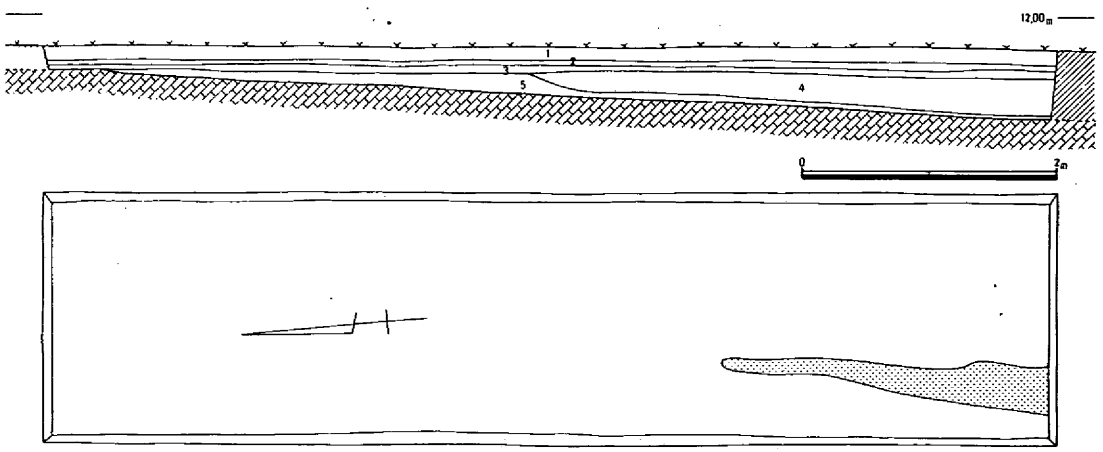
No.5 トレンチ（第11図）

No.4トレンチで遺構を検出したため、その遺構がどの範囲まで広がっているかを確認するために設定した補助トレンチである。No.4トレンチで検出した遺構は検出できなかったが、南端部分で南に下がる幅の狭い溝を検出した。したがってNo.4トレンチとNo.5トレンチを設定した水田には、広い範囲に遺構が存在することが考えられる。

出土遺物としては須恵器の破片を少量だけ採集したが、図化することはできなかった。

1．黒灰褐色砂質土　2．灰褐色砂質土　3．酸化鉄・マンガン

4．黄褐色･灰褐色･黒褐色等混合粘質土　5．灰褐色土

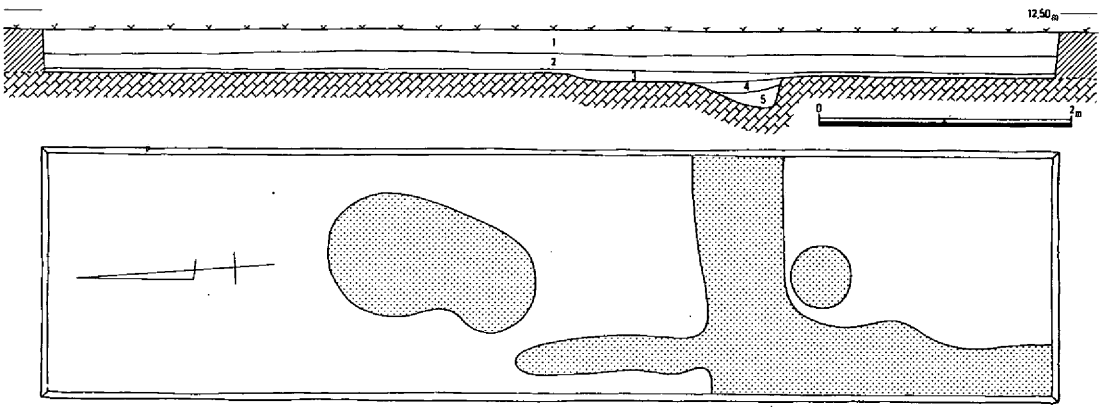


第11図　No.5 トレンチ実測図（１／60）

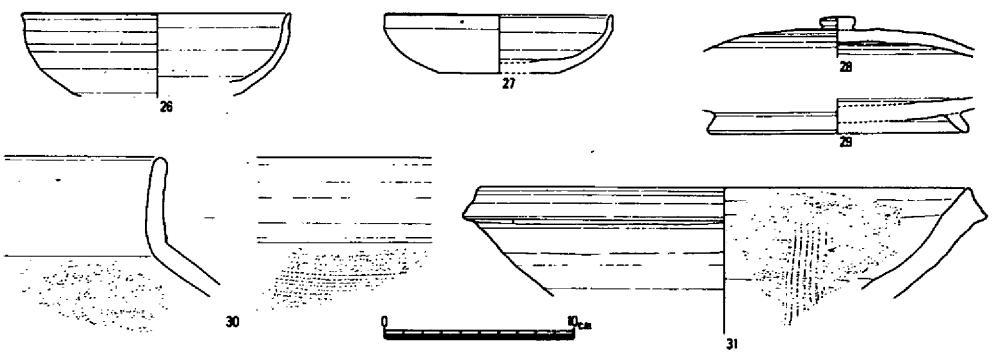
No.6 トレンチ（第12図）

県道備南牛窓線と西谷の集落を結ぶ町道が屈曲する地点に位置する。発掘調査を行う以前には牧草が植えられていて、周囲の畑地や水田よりも高くなっていた。表土面より約35cmで基盤層に到達するが、トレンチのほぼ中央部で長径約170cmを測る楕円形の土壙を検出した。土壙内からは須恵器の甕（30）が出土したが、検出面に存在する土器片を採集するにとどめ、遺構内は掘り下げなかった。さらに南側では、交差する溝と柱穴と推定される直径約50cmの小穴を検出したが、壁面に沿って溝の深さを確認しただけである。東西方向に走る溝には、灰褐色と黄褐色を呈する粘質土の下位に暗灰褐色砂質土が堆積し、溝の底部から中世の土師質小皿の小片が出土した。灰褐色砂質土より備前焼の擂鉢（31）も出土しているから、雨落溝の伴う中世の建物が存在する可能性が強い。このようにNo.6トレンチでは、時期の異なる土壙と建物と思

1．黒灰褐色砂質土　2．黄褐色・灰褐色・黒褐色等混合粘質土　3．灰褐色砂質土
4．灰褐色・黄褐色混合粘質土　5．暗灰褐色砂質土



第12図　No.6 トレンチ実測図（1／60）

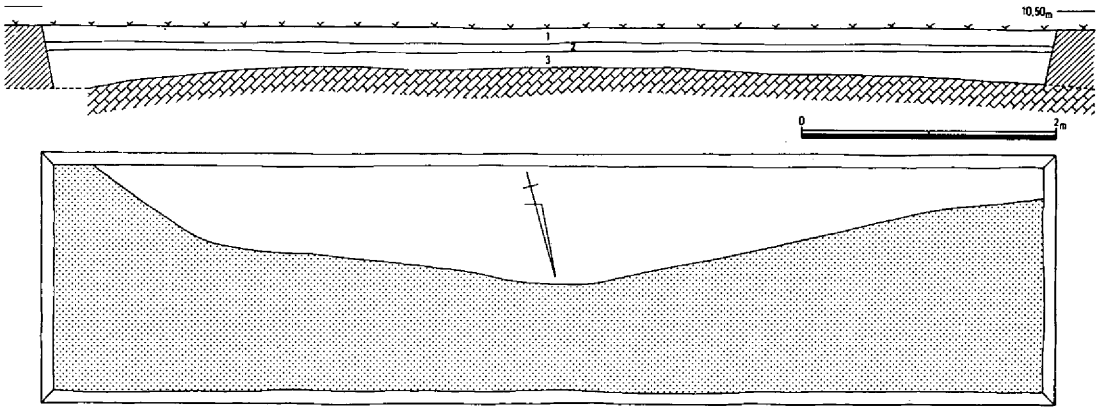


第13図　No.6 トレンチ出土遺物（1／4）

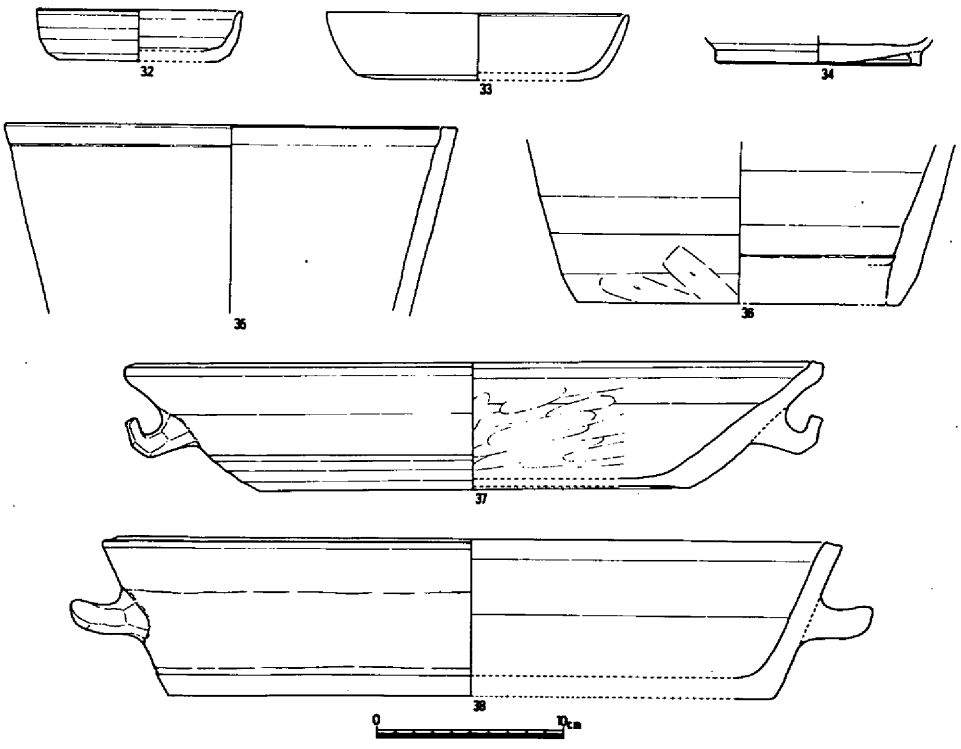
われる遺構を検出したのである。

出土遺物（第13図）としては奈良時代のものと中世のものが認められるが、前者は土壙周辺から、後者は南側部分の溝から出土した。

1．黒灰褐色砂質土　2．酸化鉄・マンガン　3．灰茶褐色砂質土



第14図　No.7 トレンチ実測図（1／60）



第15図　No.7 トレンチ出土遺物（1／4）

No.7 トレンチ（第14図）

発掘調査を実施した範囲の南東端に位置する。この地点より東側は、急激に低くなって水田面に湧水が認められた。表土面から約30cm掘り下げると基盤層に到達したが、その基盤層は両端の東西方向と北方向へ緩やかに傾斜していた。その基盤層の下がる状態は現地形とは逆の方向を示し、焼成の良好な須恵器が多量に出土したこともあって、このNo.7トレンチの地点には溝と推定される遺構が存在すると判断した。

多量に出土した遺物のほとんどが須恵器で、土師器は2片が認められるだけである。出土した須恵器（第15図）には、形態に特徴のある大形品が存在する。35と36は甑の口縁部と底部、37と38は把手を有する浅い鉢である。いずれも小破片で、全形を知ることができない。

No.8 トレンチ（第16図）

調査範囲のほぼ中央に、南北方向に設定したトレンチである。表土面から基盤層にかけて、黒灰褐色砂質土、灰褐色砂質土、酸化鉄とマンガンが水平に堆積しているだけで、遺構や遺物は存在しなかった。

No.9 トレンチ（第17図）

No.8トレンチから約25m北西に移った地点に位置する。表土面から基盤層までは30～45cmを測り、基盤層が西から東方向へわずかに傾斜している。西端部分に現代の暗渠排水路が認められただけで、遺構は存在しなかった。

出土遺物として須恵器と土師器の小破片を少量だけ採集したが、いずれも表土面に近い部分から出土したもので、表面が著しく摩滅している。

No.10 トレンチ（第18図）

南北方向を示している町道に挟まれた地点の、海抜16.63mを測る畑地に位置する。表土面は畑の畝が東西方向に残存していたため、全体に「凹凸」になっていた。トレンチの北側部分では黒灰褐色砂質土と灰茶褐色砂質土が堆積していたが、南端部分になると基盤層が緩やかに傾斜し、表土面から約50cmの深さになっていたが、遺構は検出できなかった。

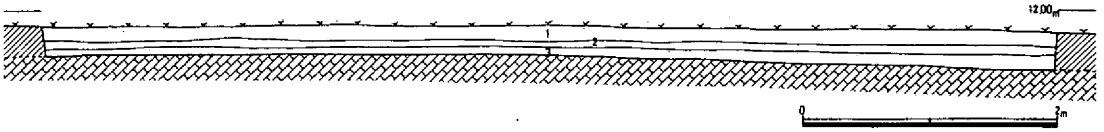
出土遺物として須恵器と備前焼を少量だけ採集したが、いずれも細片で図化できなかった。

No.11 トレンチ（第19図）

発掘調査を実施した範囲の北端に位置する。表土面から約25cmも掘り下げると基盤層に到達し、黒灰褐色砂質土と黄褐色、灰褐色、黒褐色などを呈する粘質土が堆積していた。トレンチの中央よりやや西に寄った地点で南北方向を示す幅約110cmの浅い溝を検出したが、覆土の茶褐色と暗褐色の混合土内よりビール瓶の栓を採集したため、現代の溝と判断した。

出土遺物として須恵器の小破片と鍋の支脚片があるが、いずれも耕作土の黒灰褐色砂質土から出土したもので、図化することができなかった。

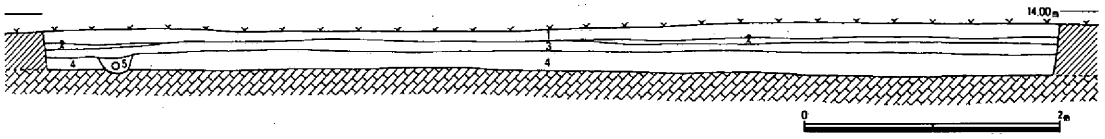
1．黒灰褐色砂質土　2．灰褐色砂質土　3．酸化鉄・マンガン



第16図　No.8 トレンチ断面図（1／60）

1．黒灰褐色砂質土　2．酸化鉄・マンガン　3．暗茶褐色砂質土　4．灰褐色土

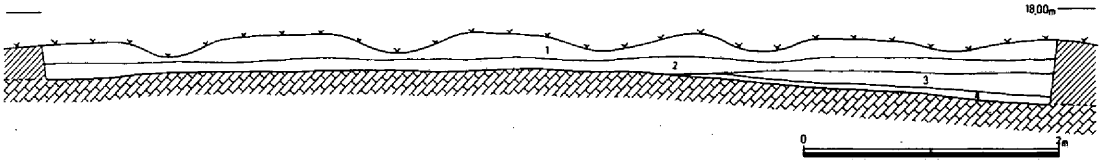
5．暗渠排水路



第17図　No.9 トレンチ断面図（1／60）

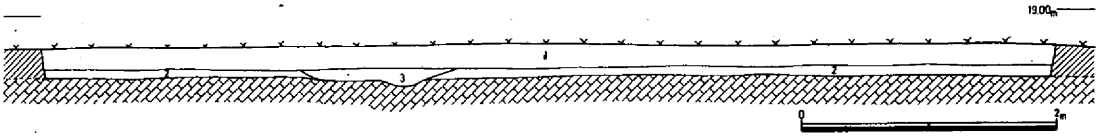
1．黒灰褐色砂質土　2．灰茶褐色砂質土　3．黄褐色・灰褐色・黒褐色等混合粘質土

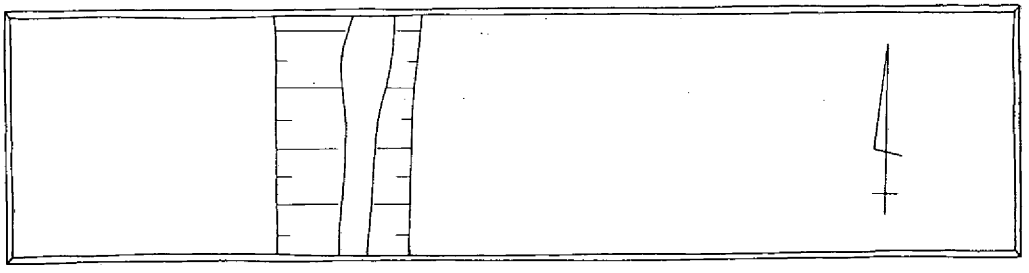
4．暗茶褐色砂質土を含む黄褐色粘質土



第18図　No.10トレンチ断面図（1／60）

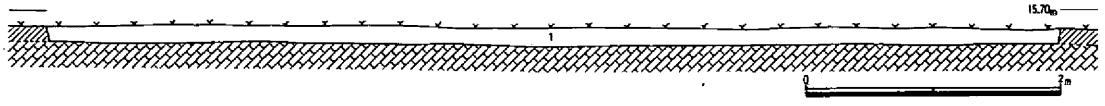
1．黒灰褐色砂質土　2．黄褐色・灰褐色・黒褐色等混合粘質土　3．茶褐色と暗褐色の混合土





第19図　No.11トレンチ実測図（1／60）

1．黒灰褐色砂質土



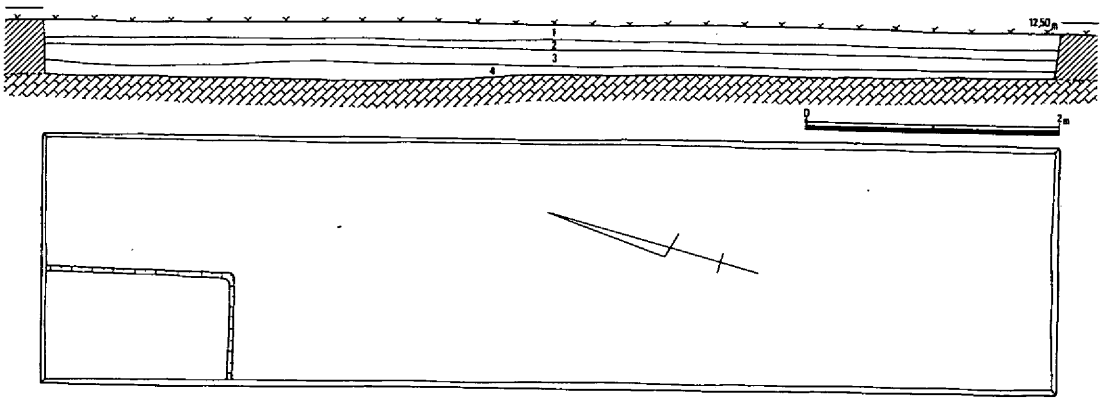
第20図　No.12トレンチ断面図（1／60）

No.12トレンチ（第20図）

調査範囲の北東端に位置する民家の間に設定したトレンチである。耕作土の黒灰褐色砂質土を除去すると基盤層で、遺構は存在しなかった。

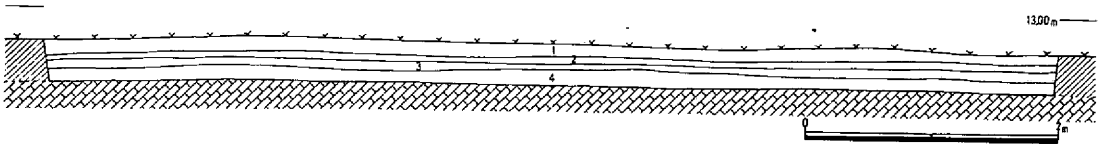
出土遺物として表面が摩滅した4片の須恵器を採集した。

1．黒灰褐色砂質土　2．酸化鉄・マンガン　3．灰茶褐色砂質土　4．灰褐色土



第21図　No.13トレンチ実測図（1／60）

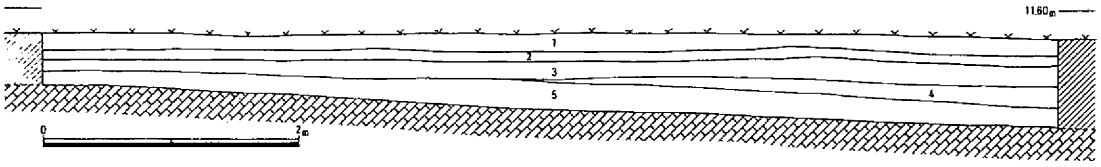
1．黒灰褐色砂質土　2．灰褐色砂質土　3．酸化鉄・マンガン　4．灰茶褐色砂質土



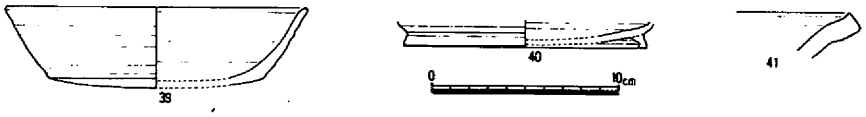
第22図　No.14トレンチ断面図（1／60）

1．黒灰褐色砂質土　2．酸化鉄・マンガン　3．灰茶褐色砂質土　4．灰黄褐色砂質土

5．灰褐色土



第23図　No.15トレンチ断面図（1／60）



第24図　No.15トレンチ出土遺物（1／4）

No.13トレンチ（第21図）

発掘調査を実施した範囲の東端に位置する。この地点よりさらに東側は、緩やかに下降して東須恵の盆地に至る。トレンチの北西隅で方形または長方形を呈する浅い落込みを検出したが、上層に存在する灰褐色土が堆積していただけで、遺構とは考えられなかった。

出土遺物として須恵器を採集したが、いずれも摩滅したりマンガンが付着した小破片で、図化することはできなかった。

No.14トレンチ（第22図）

No.13トレンチの東方約50ｍの地点に位置する。表土面から基盤層まで約35cmを測り、土砂がほぼ水平に堆積していただけで、遺構は存在しなかった。

出土遺物として奈良時代と推定される須恵器の小破片以外に、中世の備前焼と糸切り底の須恵質椀の破片があるが、いずれも小破片のために図化ずることができなかった。

No.15トレンチ（第23図）

No.７トレンチの北側に町道を挟んで位置する。このトレンチは、No.７トレンチで北側に傾斜する溝状の遺構を検出したので、その広がりを確認するために設定した補助トレンチである。表土面から基盤層までの深さは、北端部分で約40cm、南端部分で約70cmであった。基盤層は北から南に向けて緩やかに傾斜するが、遺構は検出できなかった。したがってNo.７トレンチで検出した溝状の遺構は、町道の位置周辺まで広がり、町道より北側の水田までは達しないことが判明した。

出土遺物はいずれも須恵器の破片であるが、表土面近い黒灰褐色砂質土や灰茶褐色砂質土から出土した。41は甕の口縁部の小片であるが、外面に自然釉の付着が認められる。

No.16トレンチ（第25図）

調査範囲のほぼ中央の位置で、東西方向を示す町道の南側に存在する三角形の水田に設定したトレンチである。この地点の東側と南側は大きな高低差があり、北東から南西に細長い２枚の水田が存在する。トレンチの北端部分では表土面から基盤層まで約25cmと極めて浅いが、南端部分になると基盤層が緩やかに傾斜しているため、約75cmも掘り下げないと基盤層に到達しなかった。トレンチの南東隅で、暗褐色土の覆土内に多量の土器片を含む遺構を検出した。その地点から約２ｍ北に寄った所で、トレンチの壁面に近接して短径約55cm・長径約60cmを測る楕円形の小土壙も検出した。この土壙内には黒褐色土が含まれ、炭化物が多く含まれていた。

出土遺物には奈良時代のものと中世のものがあり、前者が量的に多い。42～46は須恵器の高台を有する杯、47は甕の口縁部、48は鍋の口縁部、49は糸切り底の須恵質椀、50は「早島式土器」と呼ばれる高台付土師質椀である。図示した以外の中世土器として、備前焼や土師質小皿などの小破片を採集している。

No.17トレンチ（第27図）

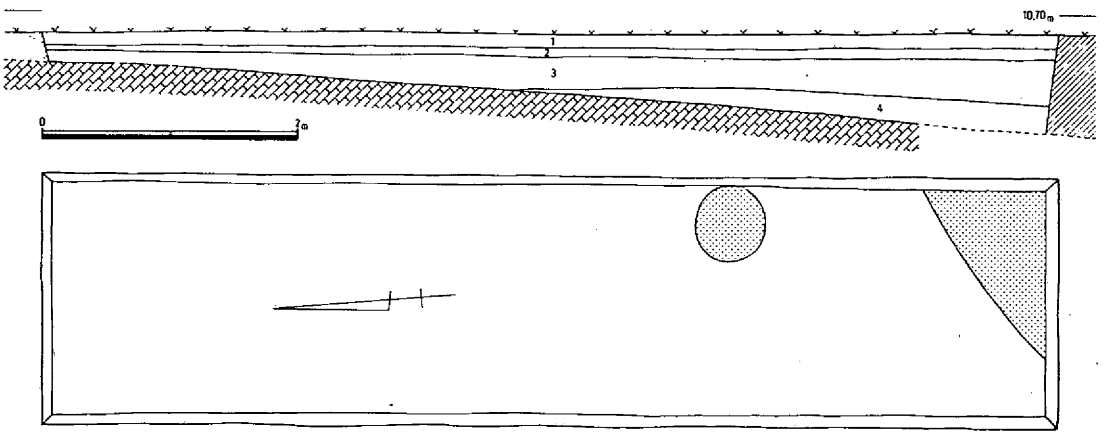
No.7トレンチの南隣の水田に位置する。表土面から基盤層までの深さは、北端部分で約45cm、南端部分で約75cmを測り、基盤層が北から南に向けて傾斜していた。北側部分で2条の著しく浅い溝を確認したが、溝内に含まれている土砂が別のトレンチで比較的表土面に近い部分に存在するものに酷似していたため、近世または現代の水田に関連した排水溝と考えた。

遺物は精査したにもかかわらず出土しなかった。

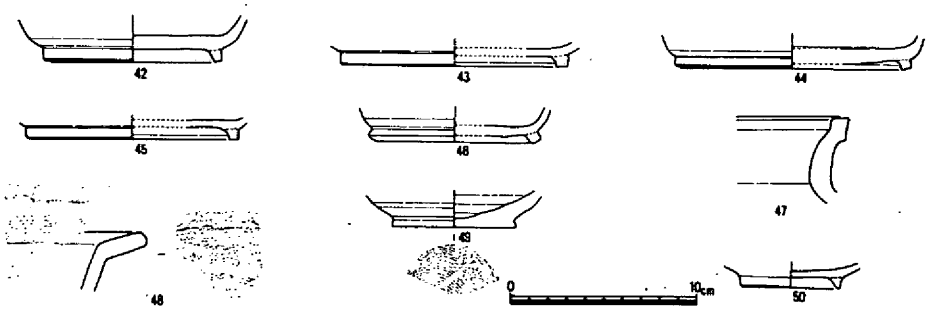
No.18トレンチ（第28図）

発掘調査を実施した範囲の中央よりやや西に寄った地点に位置する。トレンチの表土面から基盤層までの深さは、北端部分で約20cmと極めて浅いが、南端部分では約65cmを測り、暗褐色土を含む遺構面を検出した。トレンチの壁面に沿って遺構内を部分的に掘り下げたところ、遺物は存在しなかったものの、底部が比較的水平になっているのを確認した。またトレンチの中央部では、柱穴と推定される楕円形の小穴を2か所で検出した。

1．黒灰褐色砂質土　2．酸化鉄・マンガン　3．灰茶褐色砂質土　4．灰褐色土



第25図　No.16トレンチ実測図（1／60）



第26図　No.16トレンチ出土遺物（1／4）

No.19トレンチ（第29図）

調査範囲の西端に設定したトレンチである。この地点より西側は、邑久町の千町川に流入する小川が流れている深い谷になる。トレンチの表土面から基盤層までの深さは約20cmを測り、黒灰褐色砂質土の水田耕作土直下に酸化鉄とマンガンの層が存在し、遺物は出土しなかった。

No.20トレンチ（第30図）

県道備南牛窓線と西谷の集落を結ぶ町道の北側で、遺構を検出したNo.6トレンチとNo.16トレンチに近接した地点に位置する。このトレンチを設定した水田面は、No.6トレンチの遺構検出面よりも低くなっていた。トレンチの表土面から基盤層までの深さは30～40cmを測り、黒灰褐色砂質土、灰褐色砂質土、酸化鉄とマンガン、灰茶褐色砂質土が水平に堆積していただけで、遺構は存在しなかった。

出土遺物として須恵器の小破片を少量だけ採集したが、いずれも表土面に近い部分から出土したもので、表面が著しく摩滅している。

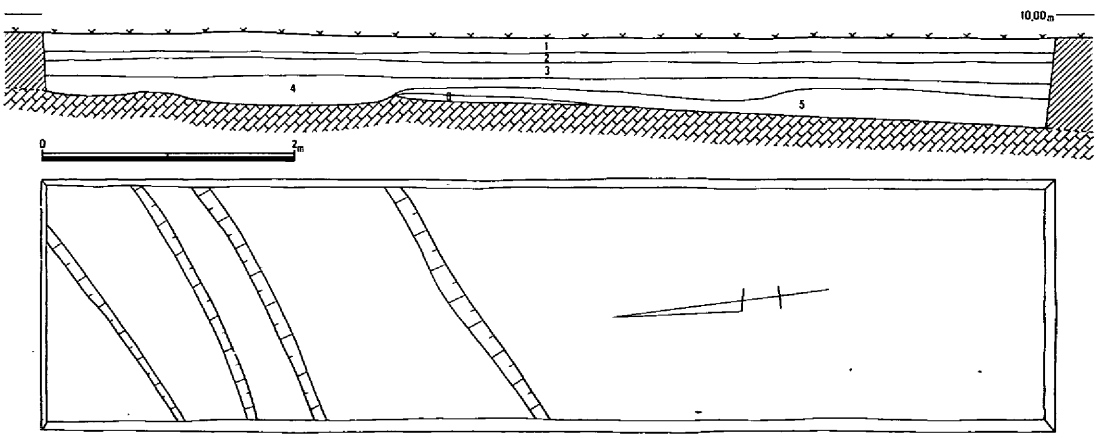
No.21トレンチ（第31図）

調査範囲の南端に位置する、北東から南西方向に細長い水田に設置したトレンチである。トレンチの表土面から基盤層までは55～70cmと比較的深くなっていたが、酸化鉄とマンガン層の下位に灰茶褐色砂質土と灰褐色土が厚く堆積していただけで、遺構は確認できなかった。

出土した遺物の量は、遺構を検出したNo.4トレンチやNo.16トレンチには及ばないものの、遺構が存在しなかったトレンチのうちでは比較的多く採集された。遺物のほとんどが須恵器の破片で、表土面に近い水田の耕作土や灰褐色砂質土から多く出土した。53の甕の破片は焼成が極めて良好で、外面全体と口縁部の内面に自然釉が付着している。

1．黒灰褐色砂質土　2．酸化鉄・マンガン　3．灰茶褐色砂質土　4．灰褐色土

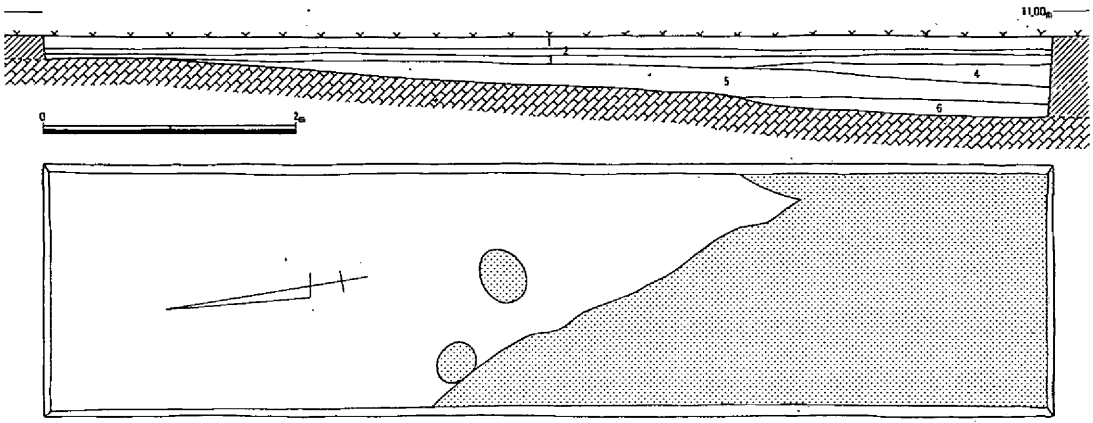
5．暗灰褐色砂質土　6．灰色粘質土



第27図　No.17トレンチ実測図（1／60）

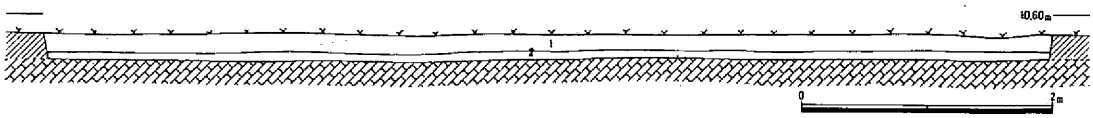
1．黒灰褐色砂質土　2．灰褐色砂質土　3．酸化鉄・マンガン　4．灰黄褐色砂質土

5．灰褐色土　　6．暗褐色砂質土



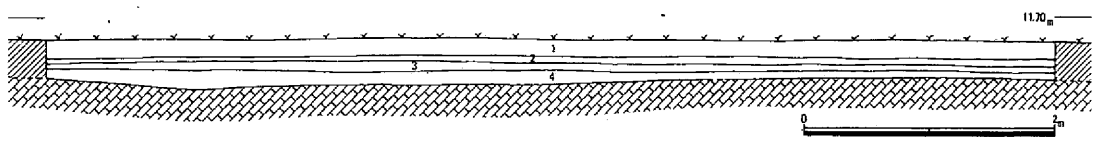
第28図　No.18トレンチ実測図（1／60）

1．黒灰褐色砂質土　2．酸化鉄・マンガン



第29図　No.19トレンチ断面図（1／60）

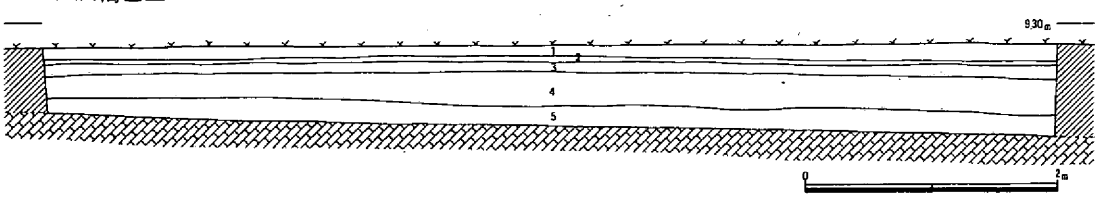
1．黒灰褐色砂質土　2．灰褐色砂質土　3．酸化鉄・マンガン　4．灰褐色土



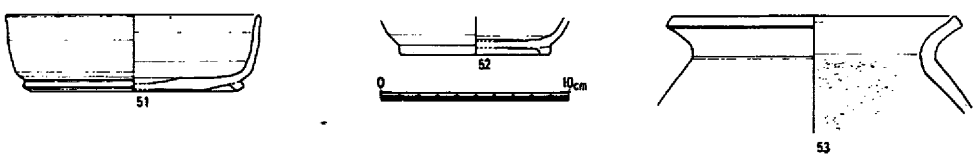
第30図　No.20トレンチ断面図（1／60）

1．黒灰褐色砂質土　2．灰褐色砂質土　3．酸化鉄・マンガン　4．灰茶褐色砂質土

5．灰褐色土



第31図　No.21トレンチ断面図（1／60）



第32図　No.21トレンチ出土遺物（1／4）

第4章　まとめ

西谷遺跡の所在する地点は、邑久窯跡群の中心地であるとともに、築山古墳という岡山県指定史跡の巨大前方後円墳の西方向に位置し、備前で最も早い時期に創建されたと推定される須恵廃寺にも近接している。この特異な地理的・歴史的環境を考慮しながら、圃場整備事業が計画されている北側部分の緩斜面約5haを調査対象に、21か所のトレンチを設定して発掘調査を実施したところ、遺跡の範囲や性格について、より具体的な基礎資料を得ることができた。ここでは、各トレンチの調査結果に若干の説明を加え、まとめとしたい。

遺構が存在することを確認したのは、No.4トレンチ、No.5トレンチ、No.6トレンチ、No.7トレンチ、No.16トレンチ、No.18トレンチの6か所である（第3図）。これらのトレンチの遺構検出面のレベルや遺構が確認できなかった隣接するトレンチとの位置関係を測量し、さらには現存する畑地や水田の立地状況を考慮して、遺構が存在する面積を算出すれば、県道備南牛窓線と西谷の集落を結ぶ東西方向の町道を中心に約3,000m²となる。

存在する遺構としては、どのようなものが考えられるのであろうか。No.4トレンチやNo.6トレンチの調査結果から、土壙が存在する。No.5トレンチやNo.7トレンチの状況から、溝が存在する。No.6トレンチの調査結果や柱穴と推定される小穴を随所で検出しているから、建物が存在するであろう。

今回の発掘調査で採集した出土遺物で、一括の土器として扱ってもよいと思われるのは、No.4トレンチ出土遺物（第10図）とNo.7トレンチ出土遺物がある。両トレンチは約100mも離れた地点に位置するが、出土遺物の器種構成や数量は相違しているものの、どちらもほぼ同時期のものと考える。これらの土器は岡山県内ではほとんど報告例のないものであるから、平城宮跡で出土した土器に類例を求めるならば、「平城宮II」と編年される土器群により近いであろう（註1）。この年代は、共伴して出土した木簡より、716～729年が与えられている。

No.6トレンチとNo.16トレンチからは中世の時期と考えられる土器（31、48～50）が出土し、遺構が存在しなかったトレンチでも備前焼や土師質土器の小皿などの小片が採集されている。

遺構が検出できなかったNo.1トレンチやNo.3トレンチなどでは、円筒埴輪の破片が極めて少数ではあるが出土している。

このように、出土遺物から西谷遺跡に存在する遺構の時期を推定するならば、円筒埴輪が使われていた頃の古墳時代、8世紀前半の奈良時代、中世の3時期が考えられ、存在する遺構の密度が濃厚なのは、出土遺物が最も多い8世紀前半の奈良時代であろう。

No.8トレンチからNo.15トレンチまで8本のトレンチを設定した北東部分の地点は、発掘調査

に着手する以前に現地踏査を行った時点では、多量の土器片が散布しているのが認められたが、今回の発掘調査では予想を覆して、遺構がまったく検出されていない。等高線に直交するように南北方向に設定したトレンチでは、できるだけ地形の低い側に位置する畑地の岸や水田の畦に接近させて掘り下げたが、耕作土直下に緩やかに南方向に傾斜する基盤層が認められただけで、遺物含層さえも検出できなかった。現存する畑地や水田の法面が急勾配で高低差が大きいから、本来は遺構の存在する遺跡であったが、畑地や水田を造成する際にことごとく削平されてしまった可能性が強い。土器片が多く散布していたのは、そのためではなかろうか。

No.17トレンチやNo.21トレンチの位置する水田より南側は、急激に低くなっている。この地点には、土器片の散布は認められずに絶えず湧水があるから、以前から湿地状を呈していたことが推察され、遺構が存在する可能性は極めて薄いであろう。

No.6トレンチの北側に位置する町道より上の部分は、圃場整備事業の計画範囲から外れている。この地点には土器片が比較的多く散布し、遺構を検出したNo.4トレンチやNo.6トレンチに近接した位置になるから、遺構が存在する確率は著しく高いと考えられる。

註

（註１）小笠原好彦・西弘海「平城宮Ⅰ～Ⅶの大別」『平城宮発掘調査報告』Ⅶ　奈良国立文化財研究所　1976年

図版 1

1．西谷遺跡遠景（南西から）

2．西谷遺跡遠景（南西から）

図版 2

1．西谷遺跡遠景（西の桂山中腹から）

2．須恵廃寺遠景（北西の桂山中腹から）

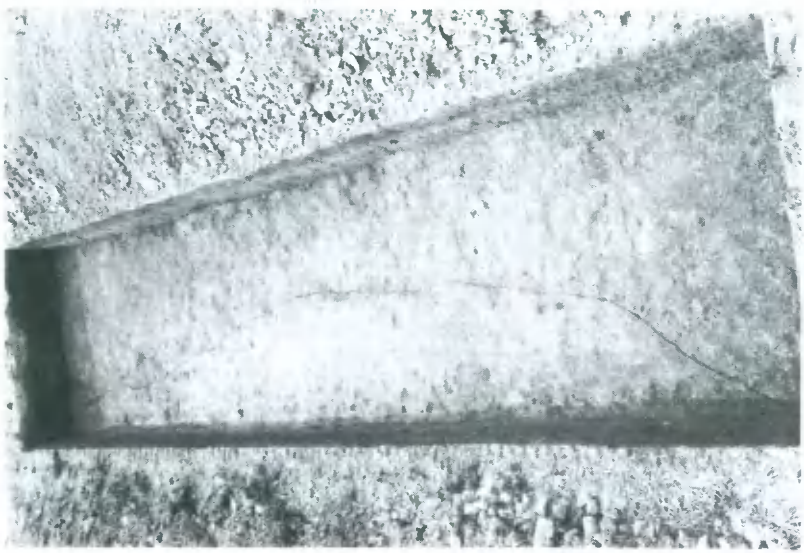
図版 3

1．No.4 トレンチ（北から）

2．No.6 トレンチ（北から）

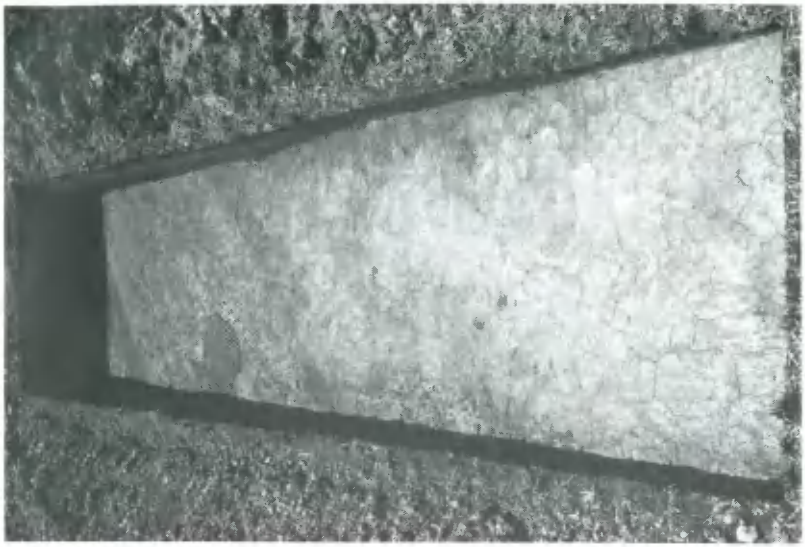
図版 4

1．No. 5 トレンチ（北から）



2．No. 7 トレンチ（東から）

図版 5



1．No.16トレンチ（北から）

2．No.18トレンチ（北から）

図版 6

1．No.1 トレンチ、No.2 トレンチ遺構確認調査状況（北西から）

2．No.1 トレンチ、No.3 トレンチ遺構確認調査状況（南西から）

図版 7

1．西谷遺跡出土遺物（1）

2．西谷遺跡出土遺物（2）

図版 8

1．西谷遺跡出土遺物（3）

2．西谷遺跡出土遺物（4）

加部（かべ）遺跡ほか

例　　言

1．本書は岡山県教育委員会が昭和58年度国庫補助を受けて実施した「加部遺跡ほか」の発掘調査の概要報告書である。

2．遺跡は和気郡佐伯町加部・加三方・大方・宇生・田賀に所在する。

3．発掘調査は文化課職員浅倉秀昭が担当し、昭和58年11月15日から昭和59年２月６日まで実施した。

4．本書の執筆・編集は浅倉が行った。

5．本書に使用したレベルは海抜高である。方位は真北である。

6．本書第２図に使用した地形図は、建設省国土地理院発行の2.5万分の１地形図（周匝）を複製、縮少したものである。

7．出土遺物の中で石器、鉄器、土製品、銅鈴が１／２で、土器は１／４である。

目　　次

例　言

第１章　地理的・歴史的環境 …… 75

第２章　調査の経緯 …… 76

第３章　発掘調査の概要 …… 79

(1)　加部（堂の元）遺跡 …… 79

(2)　三宅（尾崎鼻）散布地 …… 81

(3)　加三方（清門・穴尾）遺跡 …… 81

(4)　大方遺跡 …… 83

(5)　宇生（向）遺跡 …… 85

(6)　田賀（寺坂）散布地 …… 85

第４章　まとめ …… 87

第１節　遺跡の広がりについて …… 87

第２節　条里制地割について …… 88

図　目　次

第１図　遺跡位置図 …… 75

第２図　周辺遺跡図（１／５万） …… 76

第３図　新発見遺跡とトレンチ位置図（１／１万） …… 78

第４図　加部遺跡（１／4,000） …… 79

第５図　加部トレンチ断面図（１／80）、及び出土遺物（１／４） …… 80

第６図　加三方遺跡（１／4,000） …… 81

第７図　加三方トレンチ平・断面図（１／80）、及び出土遺物
（１／４、１／２） …… 82

第８図　大方遺跡（１／4,000） …… 83

第９図　大方トレンチ平・断面図（１／80）、及び出土遺物
（１／４、１／２） …… 84

第10図　宇生遺跡（１／4,000） …… 85

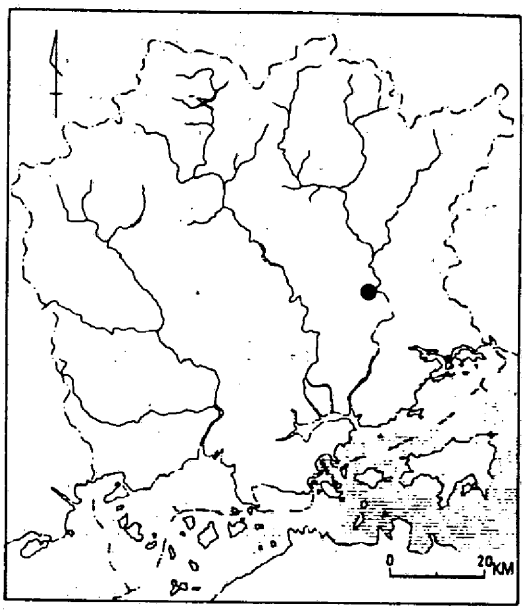
第11図　田賀散布地（１／4,000）…… 85
第12図　宇生・田賀トレンチ（１／80）と出土遺物（１／２、１／４）…… 86
第13図　条里制地割図（１／２万）…… 89
第14図　圃場整備計画図（１／２万）…… 89

図　版　目　次

図版１　佐伯町昭和地区航空写真 …… 91
図版２－上　加部遺跡遠景（北から）…… 92
中　Ｔ－２（南から）…… 92
下　Ｔ－41（北から）…… 92
図版３－上　加三方遺跡遠景（東から）…… 93
中　Ｔ－12（北から）…… 93
下　Ｔ－９（北から）…… 93
図版４－上　大方遺跡（南東から）…… 94
中　Ｔ－14（東から）…… 94
下　Ｔ－18（南から）…… 94
図版５－①　宇生遺跡近景（西から）…… 95
②　Ｔ－24（東から）…… 95
③　田賀散布地近景 …… 95
④　Ｔ－19－２（東から）…… 95
図版６　出土遺物（土器）…… 96
図版７　出土遺物（銅・鉄・土製品）…… 97
図版８　出土遺物（石器）…… 98

第１章　歴史的・地理的環境

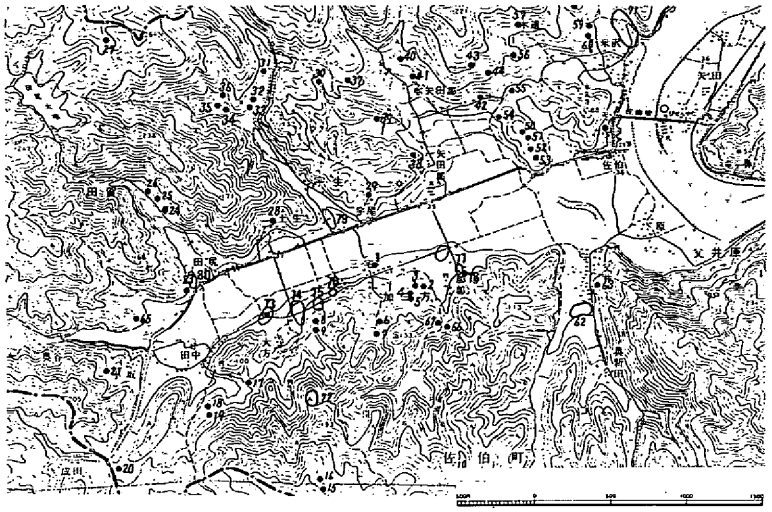
加部遺跡ほかの遺跡が所在する佐伯町昭和地区は、佐伯町唯一の平野である。（第１図）　平野の大きさは東西３km・南北平均450mを測り長軸はほぼ真北に対して70度東に偏している。東西南北いずれにも比高約100mの山並によって囲まれた盆地状を呈する平野で海抜高は60m～40m程度である。中央部を王子川がゆるやかにＳ字状に西から東へ向って貫流し、加部川他の小河川を集合して扇状地を作りながら吉井川へ直角にそそぐ。この地形は、周匝（すさい）の平野と同じ断層地形によるものと考えられる。なお平野は砂・礫、北方の山塊は花崗岩質岩により形成され、南方と東方の山塊は流紋岩質岩による。



第１図　遺跡位置図

さて、岡山県遺跡地図によると、佐伯町では72箇所の遺跡が知られている。（第２図）　内訳は遺跡が唯一弥生～中世の複合遺跡と考えられる米沢遺跡が知られているだけであり、その他天神山城跡、長楽寺跡、磐座、田原堰があり、それ以外は古墳という。すなわち古墳の分布調査はかなり詳細に行われているが、散布地と遺跡の分布調査はほとんど実施されていないことが分る。

古墳の分布状況は４Ｃの前方後円墳と考えられる桧様古墳（63）が父井にあり、八幡宮中古墳（60）が米沢に、大形の円墳の新田山古墳１号～４号（50～53）が佐伯に知られている。つまり４Ｃは吉井川の通行権を支配していた首長がいたことを物語っている。その後は６Ｃに前方後円墳（？）の向山古墳（38）が矢田部に見られる。少し吉井川から遠ざかる。そして６Ｃ後半～７Ｃには他の地域と同様に小さな谷すじまで横穴式石室を持った古墳が２～３基ずつ集中するようになる。その中でこの平野でも指を折って数える程度の石室規模の大きいものが、三宅に４基集中しているのが注目される。これらの被葬者の子孫が後の地方官に登用されたものと考えられる。４基の石室（１・２・６・７）の石室の大きさは、幅で1.8m・1.9m・1.8m・1.7mを測る。普通、古墳造成が下火になると仏寺の造営が地方でも初まると考えられるが、まだこの平野では知られていない。73以後の番号は新規発見の遺跡である。



1．三宅町田古墳
2．三宅開坂古墳
3．三宅開坂下古墳
4．東の上古墳１号
5．　〃　２号
6．三宅池尻古墳
7．藤山古墳
8．清門池東古墳１号
9．　〃　２号
23．寺坂古墳
28．土生上古墳
29．空谷古墳
38．向山古墳

第２図　周辺遺跡図（１／５万）

50～53．新田山古墳１～４号　60．八幡中古墳　71．米沢遺跡　72．たいち墓（磐座）
73．大方遺跡　74．加三方清門遺跡　75．加三方穴尾遺跡　76．加三方穴尾遺跡
77．加部遺跡　78．加部古墳　79．宇生遺跡　80．田賀散布地

第２章　調査の経緯

佐伯町昭和地区の平野部一帯には古墳以外の遺跡が全く周知されてなかった地区であった。（註１）この地区一帯を県営圃場整備する計画が東備地方振興局から県文化課に通知され、昭和57年５月８日付け、「東地振農第226号」で県文化課宛に埋蔵文化財の分布調査依頼があり、同年７月12日付け、「文埋第316号」で東備地方振興局長宛に分布調査の回答を、また、同年12月２日付け、「文埋第684号」で和気北部教育委員会教育長に報告した。約140haに及ぶ平野部について分布調査した結果、５ヶ所の散布地を確認することができたため、県教育委員会が昭和58年度国庫補助を受けて確認調査することになった。

トレンチ設定にあたっては、遺跡範囲の確認と条里制地割の考古学的調査が目的であったため、トレンチの位置については充分に配慮して調査を実施した。

確認調査の結果、４つの集落址と１つの散布地の存在が明らかになった。条里制地割りについては発掘調査では全く成果を得ることができなかったため、地図上での検討と聞き取り調査が主体となった。

発掘調査は昭和58年11月15日から昭和59年２月６日まで実施し、調査にあたっては山陽女子高等学校教諭西川宏氏に多くの教示を得た。また、佐伯町役場、和気北部教育委員会、佐伯町文化財保護委員をはじめ地権者各位には多大の御協力を得た。記して厚く御礼を申し上げます。

調査体制

岡山県教育庁文化課

課長　早田憲治　　課長代理　橋本泰夫　　課長代理　吉本唯弘　　課長補佐　河本　清

主任　遠藤勇次　　文化財保護主事　浅倉秀昭（調査担当）

調査作業員

今田喜雄　今田新一　今田善市　行本高志　万浪六治　山根正志　渋谷　守　入江　勉

近藤浅子　石原春美　末藤　栄　今田房恵　今田一枝

日誌抄

昭和58年

11月14日(月)　田賀散布地へ器材搬入。

15日(火)　田賀Ｔ－20と19－１設定・調査。

16日(水)　田賀Ｔ－19と20写真・実測。

17日(木)　田賀から大方散布地へ移動。

18日(金)　大方Ｔ－14・15の調査。

21日(月)　大方Ｔ－15・16の調査。

22日(火)　大方Ｔ－16～18の調査。

24日(木)　大方Ｔ－18の調査。

25日(金)　大方Ｔ－18の調査。

12月１日(木)　大方Ｔ－18・加三方Ｔ－12・13調査。

５日(月)　田賀散布地の協議。Ｔ－12の調査。

６日(火)　加三方Ｔ－10・11の調査。

７日(水)　加三方Ｔ－８～10の調査。

８日(木)　加三方Ｔ－７～９の調査。

９日(金)　加三方Ｔ－６・７の調査。移動。

12日(月)　加部Ｔ－１・２の調査。

13日(火)　加部Ｔ－１・２の調査。

14日(水)　加部Ｔ－２と４の調査。

15日(木)　加部Ｔ－２と４の調査。

16日(金)　加部Ｔ－２～５の調査。

12月19日(月)　加部Ｔ－３と５の調査。

20日(火)　加部Ｔ－３～５の埋め戻し。

21日(水)　加部Ｔ－２埋め戻し。移動。

23日(金)　宇生Ｔ－24・25の調査。

26日(月)　宇生Ｔ－24・25実測・写真。

昭和59年

１月９日(月)　宇生Ｔ－24・25埋め戻し。

10日(火)　宇生Ｔ－22埋め戻し。

11日(水)　加部埋め戻し。

12日(木)　加三方埋め戻し。

13日(金)　大方埋め戻し。

17日(火)　大方埋め戻し。

18日(木)　加三方埋め戻し。Ｔ－26～29調査。

20日(金)　加三方Ｔ－26～29調査後埋め戻し。

23日(月)　加三方Ｔ－30～34調査後埋め戻し。

24日(火)　加三方Ｔ－33・34埋め戻し。

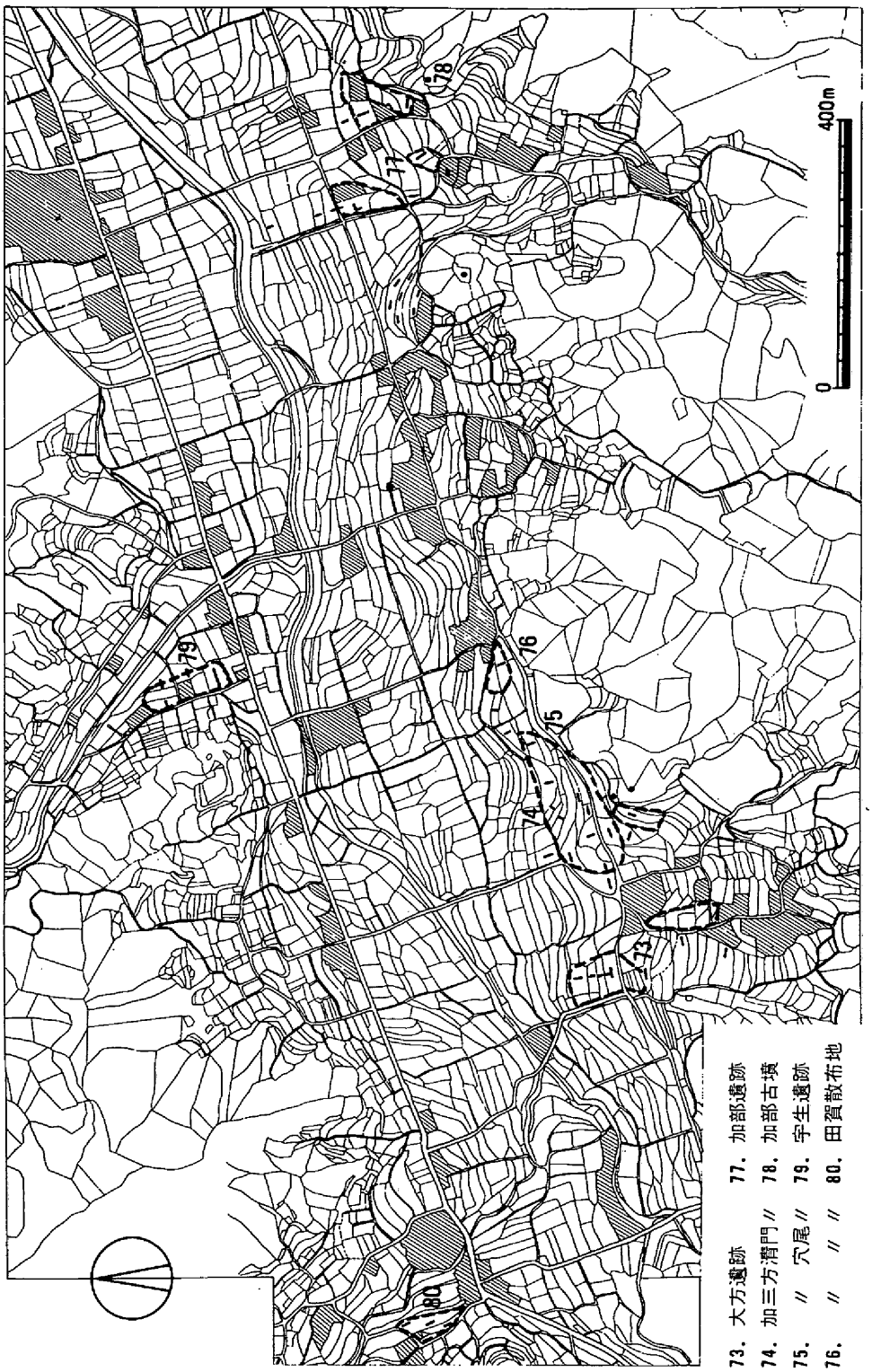
25日(水)　三宅Ｔ－35～40調査後埋め戻し。

26日(木)　加部Ｔ－41～43の設定・調査。

30日(月)　加部Ｔ－41～46の調査。

２月６日(月)　加部Ｔ－45・三宅Ｔ－46埋め戻し。器材搬出・調査終了。

（註１）　「岡山県遺跡地図」第二分冊　岡山県教育委員会　昭和49年３月



73. 大方遺跡　77. 加部遺跡
74. 加三方滑門〃　78. 加部古墳
75. 〃　穴尾〃　79. 宇生遺跡
76. 〃　〃　〃　80. 田賀散布地

第3図　新発見遺跡とトレンチ位置図（1／1万）

第３章　発掘調査の概要

発掘調査は、２ｍ×６ｍのトレンチを基本に、５つの散布地に当初25本設定した。トレンチは、全て基盤層まで掘り下げたが、遺構発掘は時期確認のための必要最少限にとどめた。調査の作業工程は、設定・掘り下げ・断面観察・遺構検出・遺構掘り下げ・清掃・写真撮影・平面と断面の実測・最後に埋め戻しする。そして調査の順序は、地元と東備地方振興局との調整の結果、田賀散布地から始めて、逆時計回りに、大方散布地、加三方散布地、加部散布地、宇生散布地という具合に実施していった。調査の進展に伴って加三方清門・穴尾遺跡に１ｍ×５ｍのトレンチを９本追加し、新発見の三宅散布地に６本、加部遺跡に埋没条里の考古学的調査を行う目的で５本、三宅町田古墳周辺に１本を追加調査し、合計46本になる。（第３図）

(1)　加部（堂の元）遺跡（第３～５図）

この遺跡は、大きく３つの地区に地形上分けて考えねばならない。当初散布地として線引きしていたのは北が用水路、南が道路と神社、西が加部川、東は低丘陵に囲まれた部分であった。したがってトレンチは第４図の様にＴ－１～Ｔ－５の５本を設定して調査した。その後、土器出土を伝え聞いたためＴ－41を設定・調査した。この田圃付近を再度分布調査してみるとサヌカイト片や弥生土器片が散布していることが分った。以下各トレンチの成果を記す。

第４図　加部遺跡（１／4,000）

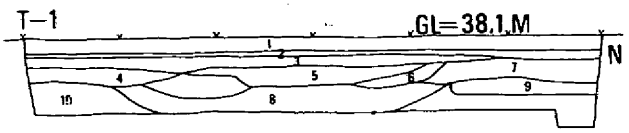
Ｔ－１は大溝が一本東西方向に検出されたが近代と考えられる。その溝の南の砂礫層から流紋岩製の撥形打製石斧が出土した。縄文晩期の土掘り具と思われる。他に弥生中期土器と須恵器・土師器が若干ある。

Ｔ－２は柱穴１本と６Ｃの須恵器包含層が検出された。包含層は斜面堆積か溝の底部か判定し難い。土器・石器が出土している。

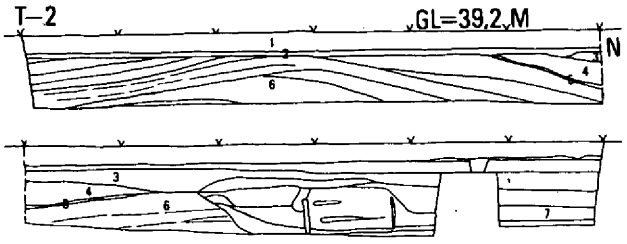
Ｔ－３は現地形でも加部川の旧河道の状態を示している。70cmまで掘り下げたが室町の遺物若干出土したのみで、湧水のため調査を断念した。

Ｔ－４は宅地と同じ高さの畑で地表下40cmで柱穴１本と炉址らしきもの一個が検出され、その下層には７Ｃ代の須恵器包含層が45cmの厚さで堆積していた。須恵器杯蓋は完品である。土錘２点と須恵器は整理箱に３箱分出土し、窯壁らしきものや、鉄滓も多数混っている。

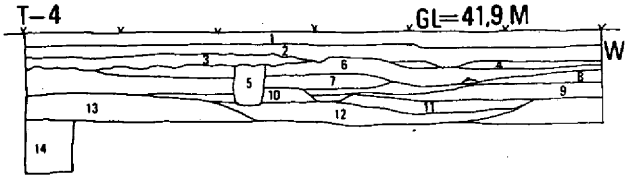
Ｔ－５は加部神社の続きの微高地端部に設定したトレンチである。耕土直下が地山であり直径



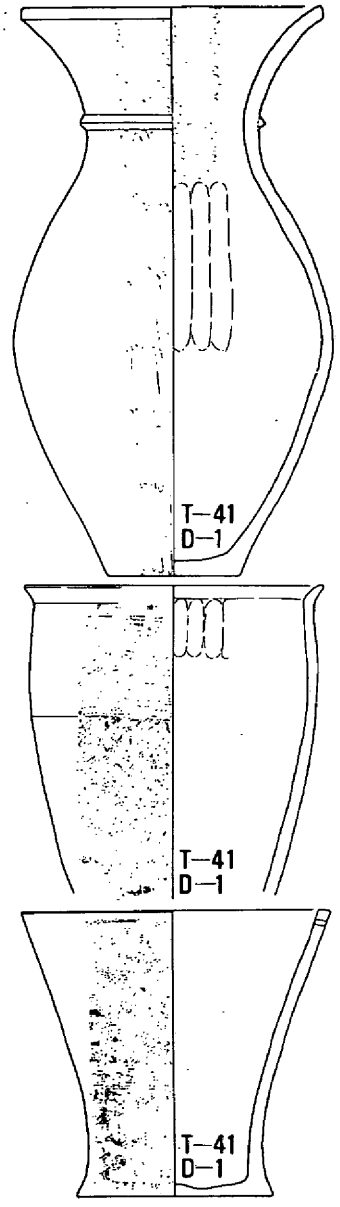
1．現水田耕作土　2．茶褐色床土　3．暗茶褐色砂
4．黒灰色粘土　5．暗灰褐色粘土　6．粗砂
7．灰色粘土混り粗砂　8．黒灰色粘土　9．暗茶褐色砂
10．白色粗砂

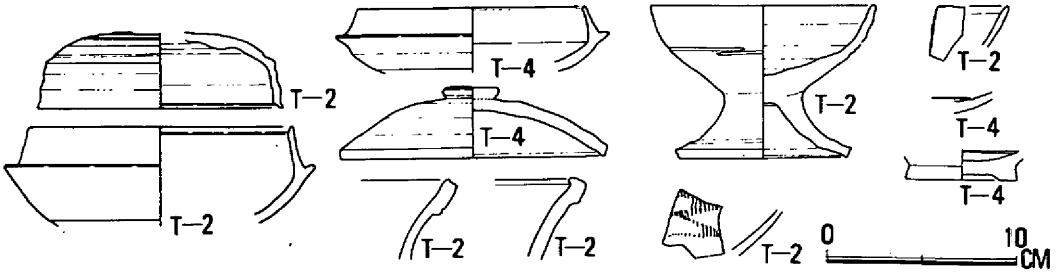


1．現水田耕作土　2．茶褐色砂　3．黒灰色砂
4．黒色砂(包含層)　5．白色砂　6．自然流砂
7．黒色粘質砂(旧水田層)



1．現畑地耕作土(元水田)　2．茶色砂
3．黒褐色土混り茶色砂　4．淡灰茶褐色砂　5．黒褐色砂
6．黒褐色砂　7．淡黒褐色砂　8．黄色土混り黒褐色土
9．黒褐色砂　10．淡褐色砂　11．黒褐色砂
12．黒褐色砂　13．淡黒褐色砂　14．褐色砂





第5図　加部トレンチ断面図（1／80）、及び出土遺物（1／4）

10cmの小さな柱穴が1本検出できたが遺物が無いため時期は不明である。

T－41は2～3年前に土器が出土したという水田で、耕土直下から弥生前期末～中期初頭の幅2m・深さ40cmの溝がほぼ南北方向に検出できた。土器はかなり大きい破片で、復元完形になるものも2～3点出土している。石鏃も出土した。(第5図・図版2)

T－42は同じ田圃で条里の縄本と考えられる町道に直角に設定したが、石器が出土したのみである。

(2) 三宅（尾崎鼻）散布地

三宅開坂古墳の所在する低丘陵の先端部に棚田があり、ここに少量の須恵器片が散布していることを確認調査中に発見した。そのため急拠1m×4mのトレンチを6本設定して調査した。しかし全く遺物、遺構を確認することができなかった。恐らくもっと低い位置か高い位置に遺跡の存在することが考えられる。三宅地区の東端に位置し、加部地区の西端にも当る所である。

(3) 加三方（清門・穴尾）遺跡(第6・7図)

穴尾池の北方に当るのが穴尾遺跡でT－6とT－9を中心とする小範囲を言う。T－10から西の方と清門池東古墳の周辺から北方を清門遺跡と呼びたい。各トレンチについて略述する。

T－6は中世と考えられる柱穴1個と溝1本が検出された。遺物は少量で弥生・古墳・中世の土器と土錘が出土。

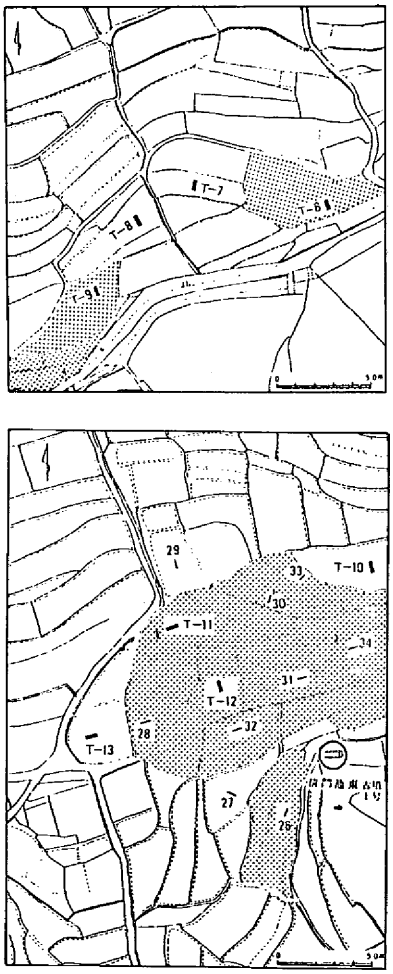
T－7は最下層にピート層が見られる。位置から考えて穴尾池の旧河道である可能性が高い。その上層は自然砂の堆積状況を示す。

T－8は中世土器・土師器・須恵器が少量出土したが、遺構は検出できなかった。地山まで35cmしかなく、かなり削平されていた。

T－9は弥生後期と考えられる柱穴が4個検出され、弥生後期土器・土師器（緑釉含）の他サヌカイトの打製石庖丁を1点出土している。

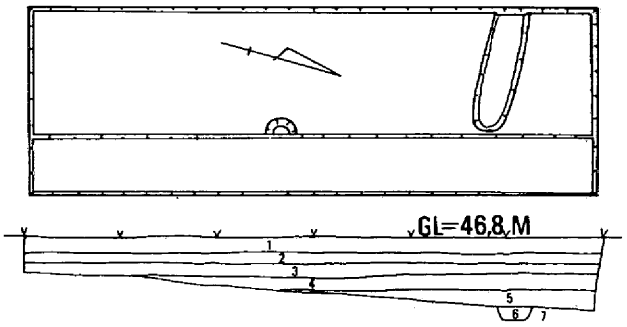
T－10は地形的には谷である。約1m程掘り下げて地山を確認したが遺構はない。弥生～中世の土器と土錘が出土した。

T－11は条里の縄本の南北道路に直交させた



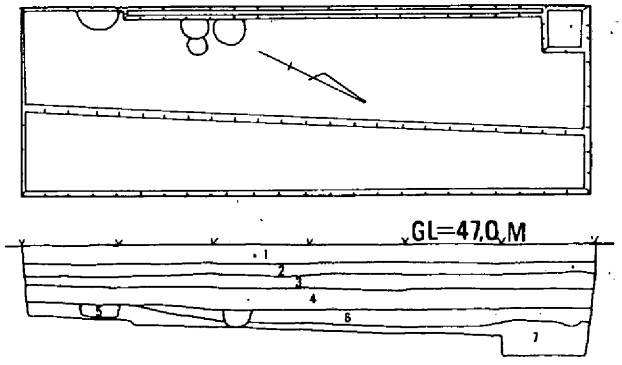
第6図　加三方遺跡（1／4,000）

T－6



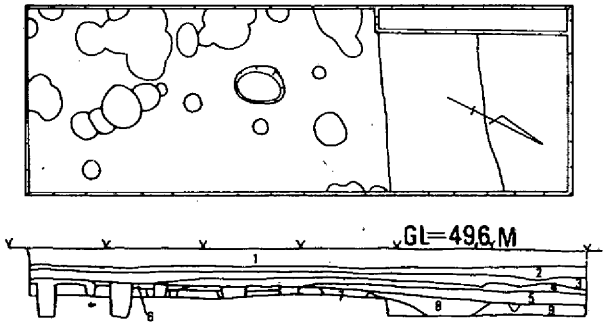
1．現水田耕作土　2．茶黄褐色砂質土　3．灰褐色砂質土
4．灰茶褐色粘質土　5．暗茶褐色粘質土　6．暗茶褐色粘質土
7．明赤茶褐色粘土（地山）

T－9

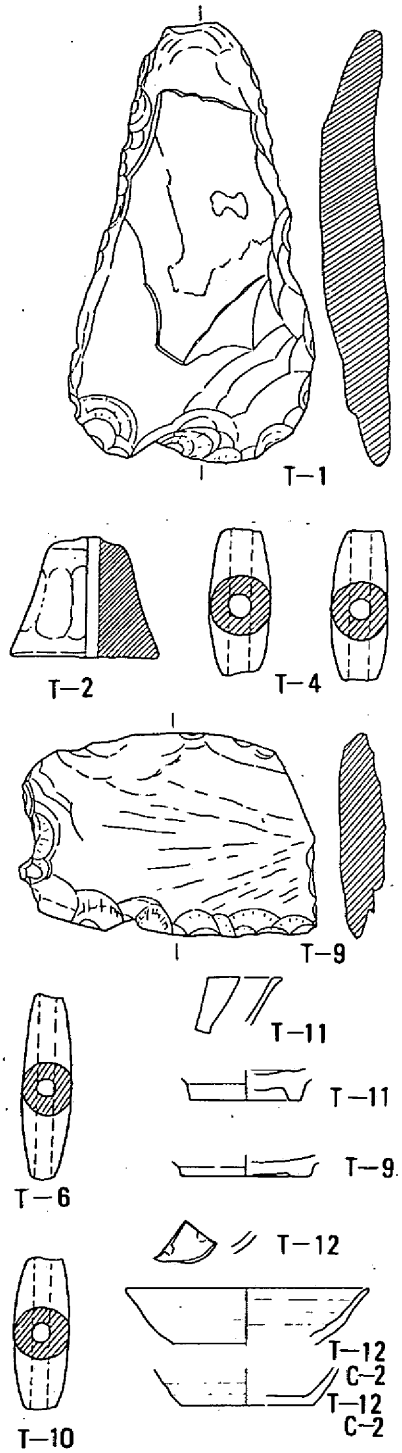


1．現水田耕作土　2．茶褐色砂　3．灰色砂
4．暗灰色粘質砂　5．黒色粘質砂　6．淡灰色粘質砂
7．赤黄褐色粘土（地山）

T－12



1．水田耕作土　2．茶褐色砂　3．灰色砂　4．茶灰色粘質土
5．灰色砂　6．真黒色土　7．黒色砂（柱穴）
8．暗茶褐色砂（溝）　9．黄褐色地山、花崗岩



第７図　加三方トレンチ平・断面図（１／80）、及び出土遺物（１／２、１／４）

が、検出したのは中世の柱穴数個と東西方向の溝1本で、中世土器と白磁片2点が出土した。条理との関係は不明である。

T－12は古代～中世の柱穴が多数検出された。土器は弥生～中世のものと、緑釉が1点ある。

T－13は遺構なし。地形的には谷部。平安時代を中心とした須恵器・土師器が少量出土する。

T－26は弥生時代と考えられる柱穴が数本あり、弥生～奈良時代の土器少量と、黒色変岩製の磨製石庖丁破片が出土した。

T－27の現地表には沢山の須恵器片が散布しているが、耕土直下が地山であり遺構・遺物ともに見つからなかった。大きく削平を受けていると思われる。

T－28は中世と考えられる柱穴が1本検出できた。

T－29は表土直下に地山が現われ、遺構・遺物は全くない。

T－30は柱穴が2本検出でき、遺物は少量の須恵器・土師器片が出土している。

T－32は段状の遺構と須恵器・土師器の包含層が検出できた。

T－33は幅50cm・深さ30cm程の南北に長い溝1本を検出し、須恵器・土師器を出土している。

T－34は弥生時代と考えられる柱穴数本が検出され、弥生後期土器と石鏃1点が出土した。

(4) 大方遺跡（第8・9図）

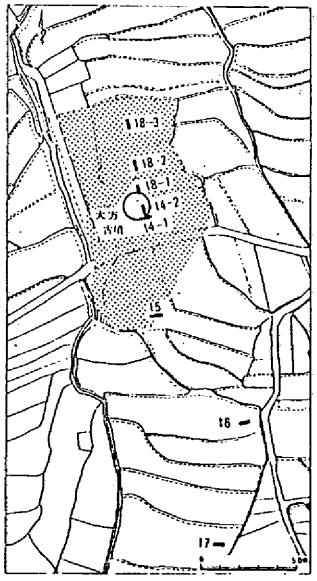
土器の散布しているのはT－17からT－14を設定した範囲であり、現況は谷水田と扇状地上の水田・畑地を形成している。T－16・17は東の舌状丘陵の傾斜面を予想して設定し、T－14・15は扇状地の扇央部に当る。T－18は遺跡の限界を知るために設定した。以下各トレンチを説明する。

T－17は遺構はないが、糸切り底の須恵器・土師器など平安時代中心の土器・鉱滓・そして縄目の平瓦片が1点出土している。この谷の奥に製鉄址と寺跡のある可能性がある。

T－16は予想通り地山が東から西への傾斜を見せる。遺構は時期不明の田境と考えられる溝がほぼ南北に検出できた。遺物は縄目瓦片・須恵器・土師器が少量出土している。

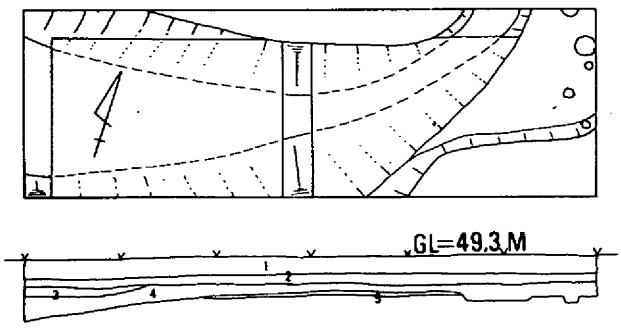
T－15は逆に西から東へ地山の急激な傾斜が見られた。西の台地上には遺構は確認できなかった。谷の堆積土中には弥生後期土器が少量包含されていた。遺跡の南東端と考えられる。

T－14－1は溝と柱穴が検出された。溝底は



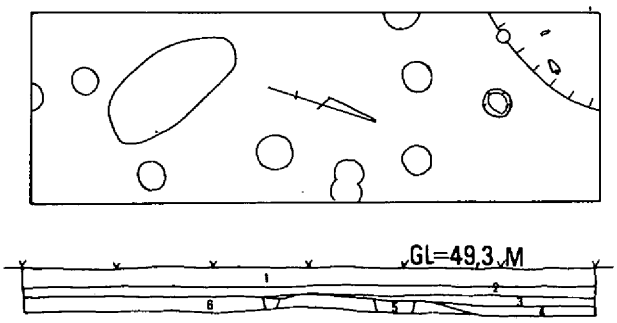
第8図　大方遺跡（1／4,000）

T－14①



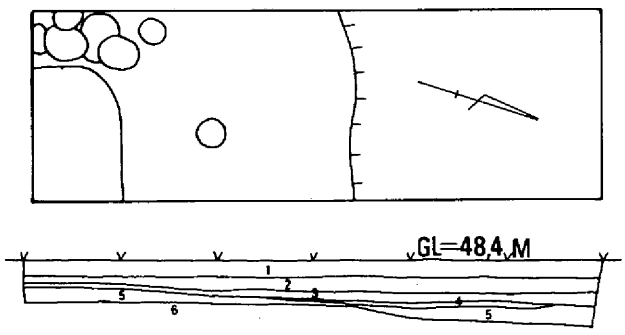
1．水田耕作土　2．茶褐色砂(床土)　3．灰褐色砂
4．黒褐色砂　5．黄褐色花崗岩風化土（地山）

T－14②

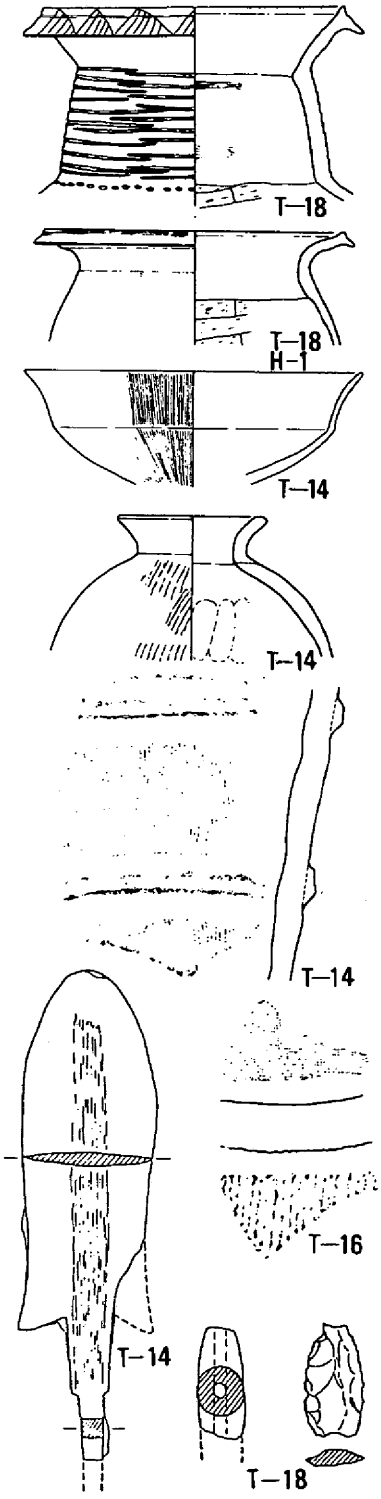


1．水田耕作土　2．灰茶色砂　3．茶褐色砂
4．淡黒褐色砂　5．淡黒褐色砂(柱穴)　6．黄褐色(地山)

T－18②



1．水田耕作土、黒灰色　2．淡灰茶色砂、床土、旧耕土
3．茶色砂、鉄分、床土　4．灰褐色砂
5．黒褐色砂、弥生土器包含層
6．黄褐色砂地山　花崗岩風化土壌



第９図　大方トレンチ平・断面図（１／80）、及び出土遺物（１／２、１／４）

東から西へ深く、ゆるやかに南にカーブする。黒色の砂で埋まり埴輪片多数と須恵器片を少し出土した。

T－14－2は柱穴多数と浅い土壙が検出できた。柱穴の1個から弥生後期の土器片が、土壙からは鉄鏃その他鉄器片と須恵器小片が出土した。

T－18－1は埴輪片多数を出土する溝と柱穴多数が検出された。溝はわずかに北へカーブする。

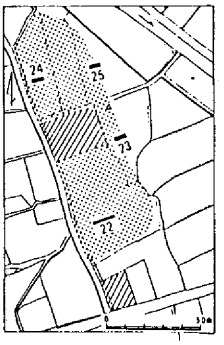
T－18－2は南の端に弥生後期の土器を出土する隅丸方形の竪穴式住居の北西隅部分を検出した。

T－18－3では弥生後期の薄い土器包含層と柱穴を確認した。

(5) 宇生（向）遺跡（第10・12図）

現況は水田と宅地で、土器の散布は南北道路の両側に見られる。今回の調査は道路の東側のみである。

T－22は中世と考えられる柱穴5本と土壙1個を検出し、中世土器少量と縄文時代の打製石斧1点が出土。



第10図　宇生遺跡（1／4,000）

T－23は中世の柱穴1本と旧河道を検出した。中世土器片とサヌカイト片が出土している。

T－24は中世の柱穴と溝を検出した。柱穴は直径10cm・深さ10cmで銅鈴（銀張）を伴う。溝はほぼ南北に延び幅2m・深さ30cmで完形土師器を伴う。

T－25では砂礫の埋積した幅3m・深さ50cmの南北方向の旧河道を調査した結果、縄文晩期土器片・石器を出土した。

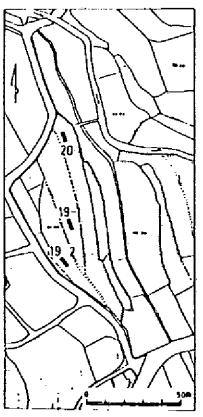
(6) 田賀（寺坂）散布地（第11・12図）

土器の散布は南北道路の両側に見えるが、今回の対象地は道の下方に限る。川の対岸には散布は見られない。

T－20は1m20cmの堆積土があり、ほとんど水田層か耕作土層と考えられる。遺物は弥生後期～近世までの土器が出土する。

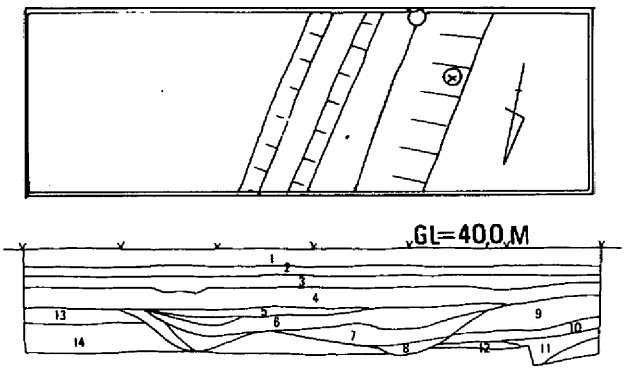
T－19－1は80cmで地山を確認したが遺構はない。最下層で平安時代の須恵器が出土する。

T－19－2は遺構は近世の溝1本で、遺物は平安～近世の土器少量と緑釉細片1点がある。



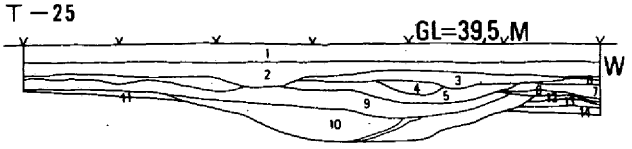
第11図　田賀散布地（1／4,000）

T－24



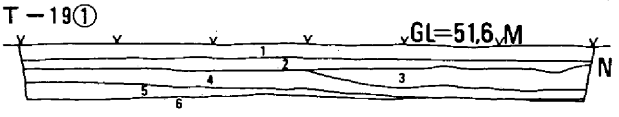
1．現水田耕作土　2．灰褐色砂　3．茶褐色砂
4．暗灰褐色砂　5．白色粗砂　6．粘土混り粗砂
7．畔状の高まり黒色粘土　8．灰色粘土
9．黒色粘質砂　土師器包含層　10．白色細砂
11．灰色細砂　12．白色粗砂　13．暗褐色砂
14．暗灰色粗砂

T－25



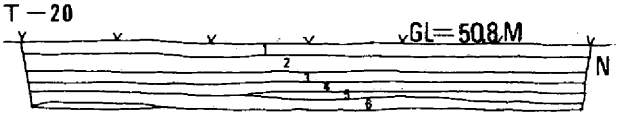
1．現水田耕作土　2．灰色砂　3．茶褐色硬い
4．灰褐色砂　5．黒色砂　6．暗灰色砂
7．粗砂　8．粘土　9．やや白色粗砂礫
10．やや灰色粗砂礫　11．灰茶色粘土　12．白細砂
13．茶色細砂　14．灰色強粘土

T－19①

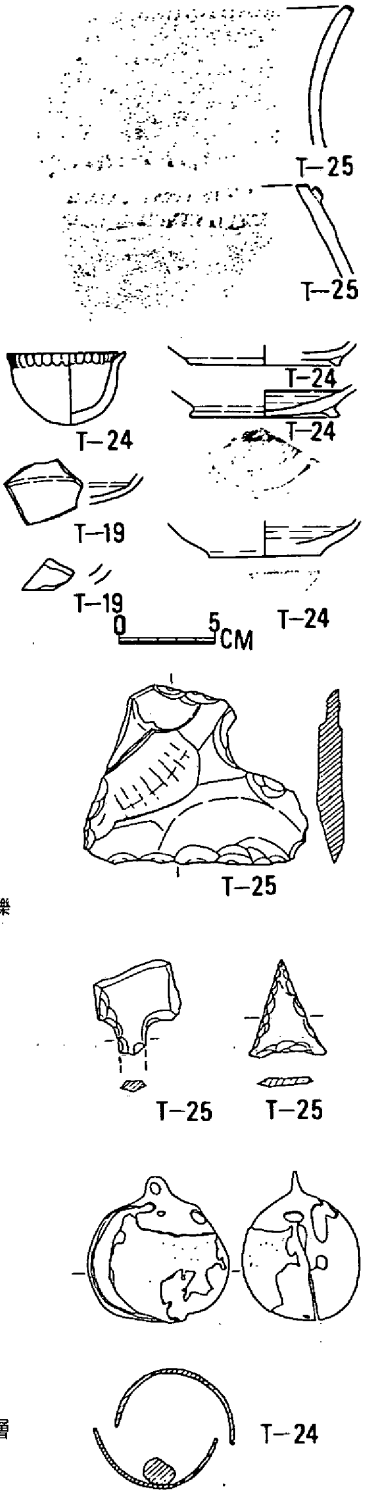


1．耕作土　黒灰色砂　2．灰白色砂　3．暗茶褐色砂
4．茶褐色砂　5．暗茶褐色砂　6．黄褐色地山

T－20



1．表土、耕作土　黒色　2．灰色粗砂　3．茶色粗砂
4．こげ茶色細砂　5．淡灰褐色砂　6．淡灰褐色砂礫層



第12図　宇生・田賀トレンチ（1／80）と出土遺物（1／2、1／4）

第4章　まとめ

第1節　遺跡の広がりについて

加部遺跡は大きく3地点にわけて考えることが出来る。まず第1地点はT－2とT－4を含む南北道路の東側の水田と宅地で南北100m・東西20～100mの台形を呈する範囲で面積は約6,000m²を測る。この地点は6C～8Cの集落址が推定される他に窯跡の存在も考えられる。第2地点はT－5を中心とする加部神社の周辺の田圃で南北50m・東西40mの菱形を呈する範囲で面積は約1,000m²を測る。この地点は時期は不明だが建物址が推定される。第3地点はT－41を含む田圃とその周辺で南北100m・東西30mの不整長方形を呈する範囲で面積は約3,000m²を測る。この地点は弥生前期～中期の集落址が予想されるが、確認されているのは溝状遺構だけであり、さらに遺跡範囲は拡大する可能性が強い。本遺跡の合計面積は約10,000m²と考えられる。

加三方（清門・穴尾）遺跡は確認調査に入る前の加三方散布地とほぼ同じ範囲であるが、今回の調査でさらにそれよりも南の町道を越えて山裾まで範囲が拡大した。この遺跡も3つの地点に分けて考えることが出来る。第1地点はT－6を中心とした範囲で，面積は約1,500m²を測り、中世の建物の存在が推定できる。第2地点は東はT－9から西はT－28まで、南はT－32で、北はT－11とT－33までで、東西230m・南北50mの不整楕円形を呈し、面積は約10,000m²を測る。遺跡の性格は弥生時代～中世の集落址である。第3地点はT－26を含む田圃とその周辺で弥生中期と古代の住居址・建物の存在を推定できる。面積は東西25m・南北80mで2,000m²ある。本遺跡は合計13,500m²に達し、佐伯町最大の遺跡と考えられる。

大方遺跡はT－18とT－14とT－15を含む南北120m東西60mの不整な長方形を呈する範囲の田圃と畑地であり、面積は約7,000m²を測る。ここでは弥生後期の集落址と埴輪を有する直径約15mの周溝を持った古墳が存在する（大方古墳)。本遺跡の範囲はT－18－3で遺構密度が薄くなったためにここを北限にしたが、さらに北へ拡大する可能性と、東限もさらに東へ拡大する可能性もある。またT－16とT－17の遺物を見ると平瓦が出土していることから、このトレンチの東側の南北に延びる低い舌状台地は一応遺跡と考えていいのではないだろうか。

宇生遺跡はT－22からT－25を含む田圃で東西40m・南北80mのほぼ長方形を呈する。面積は約3,200m²ある。遺跡の性格は縄文時代の遺物包蔵地と中世の集落址である。なお銅鈴の出土したT－24の水田とその東下方水田は、調査中に地権者の宅地化の要請があったため圃場整備の対象から除外された。銅鈴の出土した意味は不明であるが、時期は平安時代末から鎌倉時代と考えられる。ちなみに岡山県下で銅鈴が出土した地名を上げると、苫田郡加茂町万燈山古墳・

笠岡市大飛島大飛島遺跡・倉敷市山地山地遺跡・都窪郡山手村榊山古墳・邑久郡長船町牛文茶臼山古墳の5箇所ある。そして、鉄鈴は岡山市大内田天神坂遺跡から出土している。

田賀散布地はT－20とT－19を含む棚田をいう。範囲は東西50m・南北100mの三角形を呈し、面積は約2,500m²を測る。この地点は確認調査期間中に県教委文化課専門職員立会の上で昭和59年1月中に工事を終了した。遺物は一切出土していないし、掘削は遺構面にも達していない。

以上各遺跡について簡単な説明を加えたが、注目すべき遺物は石器である。サヌカイトの剝片が多いことと石鏃・石匙・石錐・削器等がそれで作られ、砥石・打製石斧等は南方の山塊が流紋岩系であるため、この岩石が利用されたと考えられる。また結晶片岩は打製石斧と磨製の石庖丁に使用されている。これだけ沢山の石器が宇生・加部遺跡を結ぶ線から東の方に特に集中出土することから、石器の工房址が宇生と加部遺跡に発見される可能性もある。銅鈴・緑釉の出土とともに遺物の面では興味ある成果であった。

遺跡の範囲確認の出来なかった所に矢田部地区がある。この地区は分布調査では遺物の散布が見られなかった所であるが、北方に戸瀬池窯跡という岡山県下で最も古いといわれている須恵器窯跡があり、東方には新田山古墳群があるため、遺跡が将来発見される可能性もある。

第2節　条里制地割について（第13・14図）

地籍図によれば、昭和地区一帯の地割南北線は現在の生活道路・用排水路が108～110m間隔で真北に対して約20度西に偏した形で平野部から一部山頂まで延びている。

また東西線は南北線に直交し、北の現県道が基準となっているようで、南の加三方の現町道とほぼ穴尾尻付近まで平行し、県道と町道の距離は330mを測り、3町に相当する。この間には2本の東西線（＝縄本という）が入るはずであり、よく地籍図通りに農道・畦畔・用水が存在している。

このように東西・南北の108～110mの正方形の地割がほぼ完全に昭和地区の平野部と一部山頂まで行なわれていることが判明した。そして、その1町四方を「坪」呼称するが、発掘調査期間中に「坪名」の聞きとり調査を実施したところ、小坂地区、矢田部地区を除いて第13図のようになった。呼び名が一定しない「坪」もいくつかあるが、ほとんど誤まりのないものと考えたい。この坪名から坪並みの検討を試みたが、結論が出なかった。

次に「坪」内の地割について地図上で検討してみると、例えば「堂の元」では半折型となっていることが分る。また大方の「定宗」でも地形に左右されながらも半折型となっている。

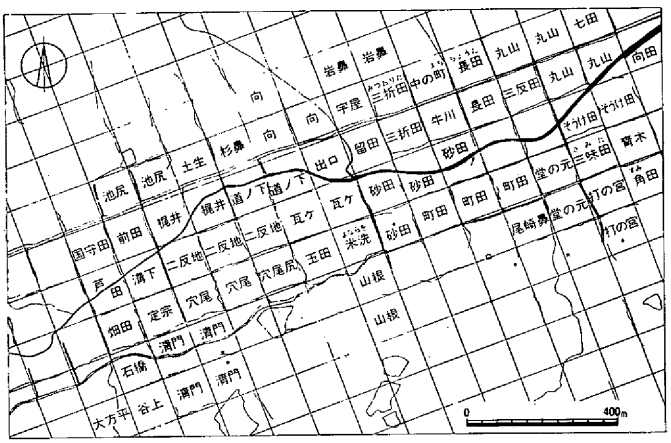
発掘調査による地割の施行時期の確認という目的があったため、縄本と考えられる道路・畦畔に対して直交するようにトレンチを設定した。これにあたるのがT－11・T－41・T－42・T－43・T－45・T－46の6本である。しかし、発掘調査の結果、埋没条里に関する資料を全

く得ることができなかった。

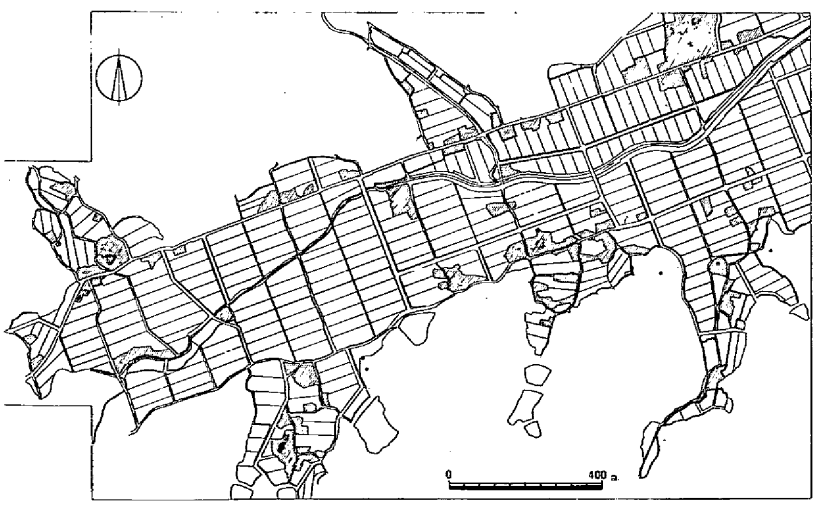
ここに圃場整備の計画図を載せたのは、計画が田圃 1 枚3000㎡であり、その長さ100ｍ・幅30ｍを基本にしており、道路・用水は現在のそれをできるだけ変更しないで拡幅していることが判るためである。つまり計画は条里制地割の景観をできるだけ保存しようという配慮がうかがえる。もちろん、細部の半折型の地割までは保存することはできない。

大規模な圃場整備により破壊される条里制地割を少しでも保存することが我々の使命であるが、この計画図は今度は条里制地割の保存にはある程度役に立つが、遺跡の破壊は防ぐことはできない。

今回の調査で遺跡の範囲をほぼ推定することができたため、この結果に基づき、圃場整備計画について再度設計協議をしなければならないが、今後の協議が注目される遺跡である。



第13図　条里制地割図（１／２万）



第14図　圃場整備計画図（１／２万）

図版 1

佐伯町昭和地区航空写真

図版 2

上．加部遺跡遠景（北から）　中．T－2（南から）　下．T－41（北から）

図版 3

上．加三方遺跡遠景（東から）　中．T－12（南から）　下．T－9（北から）

図版 4

上．大方遺跡（南東から）　中．Ｔ－14（東から）　下．Ｔ－18（南から）

図版 5

1　宇生遺跡近景　2　T－24（西から）　3　田賀散布地近景　4　T－19－2（東から）

図版 6

1 宇生 T－24 縄文　2 大方 T－18 弥生　3 宇生 T－24 土師器　4 大方 T－14－1 埴輪・須恵器　5 各トレンチ 緑釉他

出土遺物（土器）

図版 7

▽学生　T—24　銅鈴

▽大方　T—14—2　鉄器

▽各トレンチ　土製品

出土遺物（銅・鉄・土製品）

図版 8

宇生　T－25　石器

加部　T－1　石斧

加三方　T－9　石庖丁

出 土 遺 物　(石器)

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 57

大　旦　遺　跡
西　谷　遺　跡
加部遺跡ほか

昭和59年3月15日印刷
昭和59年3月31日発行

編集・発行　岡山県教育委員会
印　　刷　岡山県出納局用度課